
茜色の冬空

なゆた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茜色の冬空

【Nコード】

N7301P

【作者名】

なゆた

【あらすじ】

『杉下右京』と『神宮寺三郎』が
出逢ったらどうなるか？

ただの個人的趣味以外の
何者でもありません（笑）。

第1話

鉛色の空が、現場を覆っていた。

大勢の捜査員が次々到着し、
己の職分を果たしていく。
刑事部捜査一課、三浦信輔も
その一員である。

「どうも絞殺ですな。」

坊ちゃん刈りの鑑識が、
黒眼鏡を揺すりながら報告する。

「絞殺？」

「死斑から見ても、ほぼ。
無論、監察医の鑑定を
待たなければなりません、
頸動脈圧迫による窒息死、
というところでしょうな。」

「つまり、後頭部の外傷は。」

「窒息させた後に、あの。」
「
とって鑑識は
白手袋で宙を指す。」

「窓から落とした、
というところでしょうか。」

鑑識職員の見立ては、
長年の刑事経験で培った
三浦の直感とも一致していた。

だが、

「絞殺にしては仏さんに…。」

「そう、
抵抗した痕跡が
ないのが私も気になっている
ところですね。」

「それは気になりますねえ。」

「うわっ！」

のけぞりながら振り返った先に、

「…警部殿！」

ストライプが入った
灰色のスーツを着こなし、

縁の薄い眼鏡をかけた
いけすかない人物
が眼に入って来た。

「あ、これは杉下警部。」

鑑識課員は

すっかり打ちとけた様子で
いけすかない人物
杉下右京に近づいていく。

「先日お貸し頂いた

志ん生師匠のCD、
いやあさすが人間国宝、
素晴らしいですなあ。」

「そうですねそうですね。
ところで、米沢さん。
少々、あの窓の中を
見せて頂きたいのですが。」

といつて杉下右京は、
鑑識職員 米沢守が
指し示したビルの窓を
人差し指で俊敏に示した。

「ちよつとつ、

困りますよ警部殿…っ」

「どうぞどうぞ、杉下警部。
こちらです。」

「あ、こら、米沢っ！」

何の躊躇いもなく
やっかいな
部外者を入れていく米沢。

三浦は、薄くなることを
必要以上に危惧している
頭皮を掻き毟った。

「先輩っ！」

芹沢慶二は
前のめりに身体を浮かせながら
現場に飛び込んで来た。

「どうした芹沢あ。」

伊丹憲一は、
顎をしゃくりながら
細い目を見開いて
後輩の報告を誰何する。

「仏さんの
身元が判明しました！」

「おう。」

「被害者は

古林美里、36歳、
別名を柊里香。」

「柊里香…？」

「どっかで聞いたような…」

「売出し中の占い師ですね。
最近、テレビでも良く、
見掛けましたよ。」

「そうそうそう、

……って、

警部補……殿っ！」

相槌を打ったことを
心の底から後悔しつつ、
伊丹憲一は、
場違いなほど仕立ての良い
スーツを細身にまとった
優男を睨みつけた。

「ふふつ。」

「どうも伊丹刑事。」

「が、睨みつけられたほうは、
まったく応えていない。」

「そして、
まるで台本に書いてあるように、
くるりと後ろを向いて一礼する。」

「おや。」

米沢にイントロデビューされた
杉下右京は、
小首を傾げながら
自らの部下 神戸尊を眺める。

「どうしてここに、
ってという顔ですね、」

杉下さん。」

後ろで天を仰いでいる
捜査一課の面々を放置しつつ、
優男は勝ち誇ったように
右京を見た。

「朝、出勤したら
杉下さんがいない。」

捜査一課に行ったら
殺人犯捜査係の皆さんは
誰もいなくなってる。」

そりゃあ

誰だって分かりますよ。」

「僕が『おや』と言ったのは君がここに居る事ではなく、どうして遺体発見現場を見ないのか、ということなのですがね。」

着任して

もう半年も経つのに、
いまだに遺体に慣れない、
というのは
どうかと思いますよ。」

「そ、も、そ、も

特命係は

血を見るための部署じゃないんですがねえ。

邪魔しないで貰えますか。」

漸く立ち直った伊丹は、
精一杯の嫌味をぶつけるが、

「それはともかく、

被害者の身元情報は

どちらから

割り出しました？」

「あ、はい。

ガイシヤが所持していた
財布の中に、
運転免許証が。」

「なに全部

喋ってるんだよ！」

腹立ち紛れに芹沢の頭を
いつにも増して思い切り叩く。
声にならない叫び声をあげて
崩れ落ちる芹沢。

それを他所に、

「これですな。」

米沢の白手袋が
指示したのは
被害者の運転免許証。

「古林美里

なるほど、これが
今を時めいていた

「柊里香の素顔ですか。」

「財布の中身ですが、
運転免許証と
キャッシュカード、
クレジットカード、
後は三十万円程の
現金が入っていました。」

「随分と
持ち歩いてたんですね。」

「クレジットカードを
持ちながら、ですか。
妙ですねえ。」

「どうしてでしょう。
ヨーロッパならともかく、
クレジットカード払いが
普及せず、高額紙幣が
一般に流通している
日本ですから、
さほど不思議はないと
思いますけれども。」

尊は小さく片手を上げて

疑問をぶつけた。

「君はヨーロッパに
随分詳しいんですね。

ですが、
日常生活で使う程度なら
数万円、せいぜい、
十数万円で十分な筈です。

それに、
この財布の札入れは、

とって杉下右京は、
証拠品の財布を
思い切り開いて見せる。

御覧の通り、
とても軽いものです。

おそらく、
ファッション性に富んだ
衣服を邪魔しないように、
かつ、携帯するのに
便利なように、
軽い作りになっています。

君が大変良く
ご存じでしょうが
これは一流ブランドの

大変高価な財布です。

つまり、

三十枚ものお札を

入れるような作りには

なっていないことは、

この財布を選んだ

被害者が、一番良く、

知っているはずなのです。」

身ぶりを交えた

右京の長広舌に、

ただ一人聞き入っていた

米沢は、

「なるほど…、

それなのに、」

「被害者はこの財布に、

大量のお金を詰め込んで

殺された。」

「待って下さい。

詰め込んだ、って

どういうことですか？」

自説を論破された腹立ちから立ち直った尊が、右京の視界に廻りこみながら片手をあげて疑問をぶつける。

「米沢さん。

紙幣に付着した指紋を、採取しておいて下さい。」

「は??？」

「お言葉ですが、

紙幣は多数の人々の手に触れています。

紙幣の指紋を

全て採取することは

困難と考えますが。」

「このお札を見て、分かりませんか？」

右京は淡々と紙幣を翳す。

「…ピン札、ですね。

やけに真新しい。」

小声で納得を表した尊に、右京は札を持ったまま笑顔を見せた。

「ええ。おそらく、
特定は容易いでしょうね。」

第2話

「被害者は古林美里、36歳。
別名を 柊里香、
占い師だ。」

お前らも

既に知ってると思うが
監察医の報告から、
死因は窒息死、
絞殺と推定される。

遺体の現状から割り出した
被害者の死亡推定時刻は、
11月18日、23時〜
翌日深夜2時の間。

現場に残された
被害者の私物に、
現金32万円が残されていた。」

捜査陣が少しざわめく。

「よって、強盗の線は
薄いと考えられる。」

今後の捜査の方針であるが、
被害者の人間関係、
交友関係、仕事関係など

関連性がありそうなものを
徹底的に調べる。以上っ！」

中園参事官の

簡単なブリーフィングが終わり、

「はいっ！」

捜査陣は一様に散っていった。

「例の紙幣に

付着していた指紋ですが、

犯罪者データベースとの

一致は見られませんでした。」

米沢は特命係の二人に

淡々と採取結果を報告していた。

背後では、鑑識課員が淡々と

仕事をこなしている。

「そうですか。」

「ですが……。」

「ですが？」

神戸尊の問いかけに、
米沢は少し、
首を傾げながら続ける。

「一致した指紋がありました。

……

警視庁、新宿淀橋署副署長
田尻英治警視です。」

「淀橋署
事件現場の
管轄署ですね。」

「ええ。」

「どうして、
警察署の副署長が、
占い師に接触したのか……」

「私にもわかりません。」

「神戸君。」

「はい。」

「それを調べるのが、
我々の仕事ですよ。」

「…それで、
俺のところに
来たってわけか。」

警視庁首席監察官、
大河内春樹は、
鋭い眼光を尊に向けた。

「ふふつ。
察しがよくて助かります。」

「捜査一課は。」

「被害者の交友関係を中心に
当たっているそうですよ。」

「そうか…」

杉下警部、

他言無用に願います。」

「もちろんです、

大河内監察官。」

大河内は立ち上がり、
桜田門下を流れる
車列を眺めながら告げた。

「実は、先日、

私宛に、匿名の投書が
あったのです。

淀橋署に関しての。」

「どんな、内容の？」

「詳しくは

お答えし兼ねます。

.....

が、どうも、
あまり芳しくない
噂のようです。」

「芳しくない噂。」

「ご承知の通り、
新宿淀橋署は、
新宿東口、なかんずく
歌舞伎町などの盛り場
犯罪の温床地域を
所管する重要な署です。

特に近年、
犯罪組織の隠蔽術が
巧妙化するともに、
国際的な犯罪組織との
連携を強める、
所謂国際化、インテリ犯罪化が
急速に進んでいます。

警視庁もその点、

重々承知しており、
副署長は代々、
捜査二課の
エースキャリアを
送り込んでいる……。」

眼鏡越しに窓を眺めながら、
低く、粘りのある声で
背景説明を続ける大河内が
言い淀んだ。

「田尻副署長も、
その一人ですね？」

大河内は、
口をへの字にしたまま
背中が無言で頷いた。

「その、田尻副署長が、
ある犯罪組織と、
良からぬ関係にある…」

そういう告発が
あったのです。」

「告発元は。」

「それは
お伝えし兼ねます。」

苦々しそくに突き離す。

「そうですか。」

それで、

田尻副署長に対する、

監察官聴取は…」

「二日後でした。」

言い終わると、

大河内は、

ピルケースの中の、

錠剤を口に入れた。

「つまり、

監察官聴取する

タイミングが…」

「神戸君。」

右京は尊をさえぎり、
大河内に深く一礼した。

第3話

「あの、

田尻副署長、ですか？」

受付の女性警官は、

スーツ姿の二名の男性から

その名を聞き、

固まってしまった。

「ええ。」

「…大変申し訳ありませんが、

田尻はただいま、

休暇を取っております。」

「休暇。」

露骨に

怪しい、という表情を見せる

尊を横目に、

右京は無表情に質問を重ねる。

「そうですね。」

「…どちらに行かれたか、

「ご存じありませんか？」

「…ああ。」

「副署長に何の用だ。」

横柄な口ぶりで
二人を遮ったのは、
いかつい体格の
若い刑事だった。

「申し遅れました。
警視庁特命係の
杉下と申します。」

「同じく、神戸です。」

身分証を同時にかざしながら
二人が挨拶すると、
途端に男は大袈裟に敬礼する。

「本庁の方でしたか！
大変失礼致しましたっ。
猪下京介巡査であります！」

猪下の大きな声により、
淀橋署受付の賑やかな声が、
一瞬、止まり、
「本庁から来た
キャリア捜査官」
に注目が集まる。

「…やりづらくなりましたね。」

尊が困惑しながら右京に囁く。

「どこの組織にも、
君のような人は
いるものですねえ。」

「それ、どういう意味ですか。」

尊が右京を睨んだ直後、

「本庁の杉下警部、ですな？」

白髪・白髭をたくわえた、
愛想の良い初老の男性が、
恰幅の良い身体を揺すりながら
右京達に近づいて来た。

「貴方は？」

尊が怪訝な顔を浮かべながら
男を誰何する。

「こりゃあ申し遅れましたな。
ワシは熊野参造、この淀橋署で
刑事をやっております。」

くたびれた

コートのをの襟を正しながら
熊野が自己紹介すると、

「貴方があの熊野警部でしたか。
一度、お目に掛かりたいと
思っております。
お会いできて誠に光栄です。」

眼鏡ごしに目を輝かせながら、
やや興奮気味に
右京が挨拶を返す。

「いやいや。とんでもない。

お噂はかねがね

伺っておりますぞ。

ふもっ、

こんなところで

立ち話もなんですし、

…少々、お付き合い

願えませんかの。」

といて熊野は右京達に
先んじるように
署の正面玄関に向かって
がに股で歩を進める。

「あれ、中じゃ…。」

「光栄です。」

訝しむ尊を余所に
右京は熊野の横によって
歩き始めた。

啞然とする聴衆の視線が
取り残された尊に釘付けとなる。

「フツ…。」

尊は苦笑いを浮かべて
髪をかきあげると
逃げるように二人の後を追った。

第4話

熊野が案内した店は、
歌舞伎町の中心にある
雑居ビル下の
エスニック料理店だった。

顔見知りらしいマダムと
好々爺らしい笑顔で
二言ほど交わすと
マダムは衝立のある
円テーブル席に三人を案内した。

「喫茶店でもと思ったんじやが
なにぶん、朝からなにも
腹に入れておらんのでう。」

笑いながら弁明する熊野。

「とんでもない。
こちらには、よく?。」

「月に一度くらいですかのお。」

悪戯っぽく笑う熊野。

「お店の方とは、以前から
お知り合いなのですね?。」

「え？」

「ふおふおふお。」

さすがですのう。」

「そっか。」

月に一度来るだけの客にしては
些か親しみが過ぎますね。

熊野警部の用件も

理解していたからこそ

一番奥に席をつくったと。」

「野暮なことを言うものでは
ありませんよ、神戸君。」

少し冷淡に右京が突き放すと、

「いやいや、

おっしゃるとおりじゃよ。

さすが本庁の方は

優秀ですの。」

「とんでもありません。

お恥ずかしい限りです。」

尊が顔に軽い憤りを表す前に、

「お待たせいたしました。」

少し間延びした声で
マダムが左右の手に
大きな盆を持って現れる。

盆には小皿料理が三品、
所狭しと乗っている。
あわせて六品の小皿が
色鮮やかに並ぶと
丸テーブルは一杯になった。

「皆さんの分も、勝手に頼んで
しまいましたの。」

「恐縮です。」

「勝手ついで
とってはなんじゃが
…できれば割り勘に
願えませんかの。」

実は……この店、
少々、値が張りましてのう。」

顔を近づけ、
秘密めかして囁く熊野に
さすがの尊も吹き出した。

「もちろんです、熊野警部。」

「ふおふおふお。」

では、
いただきますしょうかの。」

暫くすると、食卓の話題は、
熊野が解決した
数々の事件に移った。

「台湾警察と組んで、
日本商社の産業スパイを
暴かれたりもされた
そうですねえ。」

「ええっ？」

「上のほうは
カンツカンじゃったがの。」

「じゃが、犯罪は犯罪じゃよ。
しかも、
殺しまで絡んでおったから
しょうがないですのう。」

「内偵はどのように
すすめられたのでしょうか？
熊野警部、ご自身で？」

「ふもっ、
さすがですのう。」

「新宿一带に
顔の知れた警部には
とても無理ですよね。」

「神戸君。」

「いやいや、

…ま、あの事件もそうじゃが、
ワシはひよんなことから
繋がりを持っていますな。」

「繋がり。」

「さしずめ、民間人の協力者、
といったところでしょうか？」

「ふおおおおお。」

「まあ、企業秘密じやな。」

「民間人との接触について
本庁から来た我々に伝えるのは
リスクが大きい、
とお考えですか？」

右京が尊をきつく睨んだ。

「ふおおおおお。」

「利発な部下をお持ちですの。
うらやましい限りですのう。」

「まったく、
お恥ずかしく限りです。」

心底恐縮したように
右京が漏らすと、

「ときに、副署長には、
何の嫌疑が
かかっておるのでしょうな？」

熊野は冗談めかしながら、
核心をいきなり突いてきた。

緊張を顔に浮かべる
尊とは対照的に
軽い調子で右京は応じた。

「まだ、なにも。」
「まだ？」

「なにぶん、捜査をはじめた
ばかりなものでして。」

「ふむ。
お二方が追ってらっしゃるのは
どんな事件ですかのう。」

右京は背筋を伸ばし、

真つ直ぐに熊野の眼を見据え、
淡々と語りはじめた。

「昨日、港区内のオフィスビルで
女性の遺体が発見されました。」

被害者は、古林美里。

彼女は、柊里香という名前で
占星術師として
活動していたようです。

死因は頸動脈圧迫による
窒息死と見られます。」

「ふむ…」

熊野は真剣な表情で
白髭をいじりながら
鋭い目線で右京に先を促した。

「被害者の所有物と見られる
財布に入っていた紙幣に
付着していた指紋が、
警察官データベースに
登録されていた田尻警視の
指紋と、
一致しました。」

「ふもっ！」

「ええっ！」

熊野と尊は、
同時に驚愕の表情を浮かべた。

尊には、右京のカードの切り方が
あまりに性急に見えたのである。

右京はわずかに苦笑しながら、
指を組みかえつつ、
改めて熊野を見据えた。

「これは僕の、
勝手な想像なのですが、

田尻警視の指紋が
付着していた紙幣は…」

「…偽札、じゃろつな。」

苦悶の表情を浮かべながら
熊野は応じた。

「ええっ！」

尊だけが、驚愕していた。

「やはり、そうでしたか。」

会心の笑みを浮かべる右京に、
熊野は苦笑せざるを得なかった。

「本庁には、

連絡しておいたのじゃが。」

「なにぶん、

別部署なものですからねえ。

「ご面倒をお掛けいたします。」

「ふおおおおお…」

「他言無用に願いますぞ。」

僅かに悪戯っぽく
熊野は念を押した。

「もちろんです。」

熊野警部。「」

第5話

「グッドニュースってやつだ。」

特命係に戻った二人は

組織犯罪対策部

組織犯罪対策5課長の角田六郎に
出迎えられた。

「やはり、

偽札がありましたか。」

「一枚だけな。」

そう言うと、角田は
鑑定書を机に滑らせた。

「一枚だけ…？」

「ああ。残りは本物だとさ。」

「一枚でも、

被害者の財布から

偽札が出た、ということは、

田尻副署長が

捜査指揮していた

偽札事件と

なんらかの繋がりがある…。」

尊が熊野とのやりとりを

思い切り洩らしながら

自らの思考を口に行っていると

「しっかし、田尻の奴
何やらかしたんだか。」

「おや。」

課長は田尻警視を

ご存知なんですか？」

鑑定書を熟読していた

右京の眼が角田を向いた。

「ああ。」

あいつがまだ、

捜査二課にいた頃に、

「二、三回、顔合わせてるよ。」

そう言いながら、

角田は特命係、

というよりは角田のために

備えられた魔法瓶から

コーヒーをマグカップに注いだ。

「可愛い顔してんのにさあ、

上司の判断に楯突いて

独断で行動する。

それがまた、ぴったりビンゴ

だったりするもんだから

上のほうは手を焼きちゃって、

まあ、

あんたもそうだな。ひひっ。」

「確かに、整ったお顔ですね。
爽やか好青年ってところです。」

改めて田尻のデータベースを
確認した尊は、
角田課長の印象を肯定した。

「若い頃の俺には負けるが、
って顔かい？ 警部補殿。」

「そんな。
今の僕にも、でしょ？」

三つの口を縦に開けて
仰け反る角田。

「独断行動の根拠は
なんだったのでしょうねえ。」

「さあねえ。
あんたらみたいに、
勝手に捜査をしてたって訳じゃ
なさそうだな。」

「捜査本部の
正式な一員ですからね。
…特命係と違って。」

「ご不満ですか？」

「そーいや、向こう側に
協力者がいたんじゃないか、
って噂があつたな。」

「協力者。」

「ガザ入れのタイミングが
あまりにビンゴだからさ。
一日ずれてりゃ
証拠ごと爆発する予定だった、
なんてことも
あつたようだしさ。」

「へへえ」

「しかし、よりによって
淀橋署とはねえ。
よっぽど上は
勘に触つたんだろうよ。」

「どうしてです？」

「なんだい、
知らないのかい？
淀橋署ってな、
キャリア連中にとっては
鬼門だよ。」

「抱える事件数は都内随一、

しかも、組織犯罪の絡む
難題が山積している。
にも関わらず人員配置は
通常の大規模署レベルであり、
定員管理の対象にも
なっている…。」

ティーカップを片手に持ち
天井に眼をやりながら
右京は滔々と解説してみせた。

「さすが警部殿、
よく分かってんじゃないの。

でもってへマすりゃ
経歴に傷が付いて、
天下りもできずに依願退職…

キャリアにとっちゃ
絶対避けたい署だろうよ。」

「確かに、
ちよつと遠慮したいですね。」

「ま、あんなの場合、
どっちにいつても
人材の墓場からは
出られんわけだな。」

哄笑する角田に、

尊は腹立ちを隠しながら
愛想笑いで応じた。

「課長、

捜査二課長からお電話です。」

組織犯罪対策5課員の

小松巡査部長が、

長身を折り曲げながら伝える。

「捜二？

珍しいな。

「じゃ、俺忙しいから。」

忙しい、を強調しながら
油を売り終わった角田は
特命係を去っていった。

「淀橋署はキャリアの墓場…

熊野警部がどれだけ活躍しても

新宿から犯罪がなくなることは

ありえませんかからね。

…なんだか、

やるせないですね。

「……あ！」

暫し感傷に耽っていた尊は、
突如、閃きを抑えきれないように
狭い特命係を動き回った。

「田尻警視が

手柄を立てていた理由が、
角田課長の言う

協力者情報の賜物だとしたら、

その協力者は、

大河内さんに聞いた

告発情報にある

犯罪組織と繋がりのある人間、

そう考えれば、

辻褄があいませんか？

つまり、被害者が協力者で、

田尻警視はそれが

露見しそうになって、

それで…」

「仮に、

君のいうとおりだとして、

自分の指紋のついた、

自分の捜査している事件に

関係している可能性が濃厚な

偽札を現場に置き去りに

するでしょうか？」

「あ、そうか…。」

「判断できるだけの材料が

足りていないうちの

予断は禁物ですよ、神戸君。」

尊はしばし目を泳がせていたが、

「はい…。」

観念したのか、珍しく、
しおらしい態度で頷いた。

第6話

「警部の仰せに従い、
捜査一課の皆さんに
偽札についた田尻警視の
指紋の件をお伝えしました。」

鑑識課に備え付けられた
データベース検索専用の
パソコンから眼を離した米沢は
自らが敬愛する右京を迎えた。

「そうですね。」

「一課の皆さんも、
手がかりがなくて
困っていましたから、
いずれ、この線でも
動き始めると思われます。」

「被害者の交友関係からは
何も出なかつたんですか？」

右手をあげて
疑問をぶつける尊。

「それが……。」

言い淀みながら、

米沢は事件の概要を記した
ホワイトボードに移動し、
被害者の写真を指した。

「柘里香には、
濃密な交友関係らしきものが
見当たらないのです。」

「といたしますと？」

「ご承知の通り、
柘里香は売出し中の
占星術師として、
一時期、多くのテレビ局で
引っ張りだこでした。」

「ええ。」

「しかし、彼女が
テレビに出始めたのは、
三か月前。

彼女と仕事をした
局の関係者、出演者
外注を含めたスタッフ、
皆、彼女のことを
知らないそうなんです。」

「おや。」

「彼女は、
ほとんどの局で、
ゲスト占い師として呼ばれ
二〜三分程度の
出演が終われば、
番組終了前に、
局を出ていってしまつ。

「局内で彼女と
親しく接しようにも、
もう彼女はいない…。」

「ええ。
そもそも、
柊里香に接することに、
忌避感情を持つ出演者も
少なくなかつた。」

「ほう。
なぜでしょう?」

「これは私の知り合いの
アイドルオタクから
仕入れた話ですが」

「つて、柊里香は
アイドルじゃ
ないでしょ。」

確かにちょっと、

可愛らしい顔を
していましたが。」

米沢は尊をきつと睨み、
眼鏡橋を押し上げた。

「アイドルとは
第三者が幻影を
託せるもの全てです。」

アナウンサー、
スポーツ選手、
ただの女子高生！
立派なアイドルです。」

壁におされかかり
たじたとなる尊を尻目に
右京は眼で先を促した。

「失敬。
柊里香がなぜ、
避けられていたか、
でしたな。」

「ええ。」
「彼女の占いは、
『当たり前過ぎる』
そうです。」

「当たり前過ぎる。」

「ええ。」

里香は

出演時間五分前に現れ、

出演直後に去っていく。

当然、出演者に

事前の挨拶もありません。

上下関係に煩い

重鎮芸能人には、

彼女に怒りを持つ者も

少なくありませんでした。

そんなある日、

ある重鎮芸能人、

名前はあえて、

W氏としましょう。

W氏は芸能界で

武闘派として鳴らし、

恐れられていました。

暴力団との繋がりを

指摘する声も、

ちらほらとあった。

そんなW氏が、

気紛れでしょう、

柊里香に占って貰う、

という出演交渉に
OKを出しました。

W氏にしてみれば、
礼儀作法も知らない
無礼な小娘に
恥をかかせてやろうと
したのでしょう。

収録当日、
里香の質問に、一切、
答えなかったそうです。」

「信頼関係から来る
当人情報の
潜在的な開示を避ければ、

占うほうは情報源が少なく
カウンセリングめいた
結果は出せない。」

「そうか。
占いは、実際は
ただのカウンセリングだ
って言いますからね。」

「仰る通りです。
ところが。」

「ところが？」

「里香は、

W氏が、暴力団関係者と
麻薬の受渡しをした
日時、場所、
相手先の暴力団の名前

これら全てを、
当人にしか分からない形で
匂わせたということです。」

「ええ??？」

「W氏は最初こそ、
態度を

取り繕っていましたが、
次第に激怒しはじめ、
スタジオはシベリアの如く
凍りついたそうです。

里香は、にわかに
酷薄な笑みを浮かべ、

「貴方は
怨念を背負っている。

貴方が
虐げた人達からの。」

とだけ言い残し、

魂の抜けたW氏と、
彫像の如く動かない
スタツフを残し、
ヒールを響かせて
スタジオ去つていった…。

おそまつさまでした。」

「つて、講談ですか。」

尊が腰砕けになる。

「知り合いの
アイドルオタクから
聞き及んだ情報を
忠実に描写したまでです。

若干、私の想像が
混ざっておりますが、
当たらずとも遠からず、
といったところでしょう。

いや、まさしく
氷の微笑、
といったところ
でしょうなあ。」

「はあ…。」

いつのまにか

閉じた扇子を右手に持つ
米沢を呆然と眺める尊。

「それで、避けられた？」

「ええ。

芸能界というのは、
きな臭い場所です。

スポットライトを
浴びられる場所に
しがみついていたようにする
芸能人は、多かれ少なかれ、
脛に傷を持っている。

それを、
洒落の範囲を超えて、
公の場で、あれこれ、
暴かれてはたまらない。」

「なるほど…。
で、その番組って
放送されたんですか？」

「当然、お蔵入りです。
洒落になりませんから。」

「ですよね。」

…って、じゃ、
アイドルオタクの人は

「どうやってそれを？」

「局内にも、

彼らの内通者は

いるんですよ。」

米沢の眼がきらりと光る。

「こっわ…。」

「プロダクションのほうは

調べましたか？」

右京が水を向ける。

「それが…、

彼女はプロダクションに

属していないそうです。」

「全て、個人で

スケジュール管理を

していたと。」

「ええ。

もっとも、彼女のような、

特殊な技能を理由に

スポット出演する人には、

必ずしも、珍しいことでは

ないそうです。」

彼女と出演交渉していた
スタッフとも、
極めて事務的な関係に
留まっていたようです。」

「なるほど。では、
古林美里さんのほうは？」

被害者の本名に
注意を喚起した右京に、
米沢は暗い顔を向けた。

「これがまた、まったく。」

「まったく？」

「もともと
彼女の素性に関心のあった
フリーの芸能記者達が、
警察よりも遥かに
濃密な取材をして
古林美里の痕跡を
追いかけたのですが。」

「なにも出てこない。」

「ええ。」

「やはり、そうでしたか。」

「…どっぴいっぴいなんです？」

右京はひとつ、頷くと、
ホワイトボードの周りを
闊歩しながら
講釈をはじめ。

「考えてみてください。」

被害者の本名が
古林美里であるものを
示したのは、
彼女が所持していた
運転免許証だけです。

そして、その直後、
彼女が、テレビで話題の
『柊里香』だ、
という情報が流れる。

不思議ですねえ。
どうやって彼女が、
柊里香だと分かったのか。」

「ええ??？」

「しかし、現状に残っていた
柊里香の指紋と、
テレビ局に残されていた
飲みさしのペットボトルと、

指紋が一致しています。
DNA鑑定の結果も同様です。

彼女が柊里香であることに
間違いはないと考えますが。」

「それもおかしな話です。」

米沢の

やや性急な口調で行った抗議を、
右京は言下に否定した。

「柊里香は

出演時間五分前に現れ、

出演終了後に去っていった。

打ち合わせは電話のみで

事務的に済ませている。

随分慎重な人物です。

その人物が、

忌避されている芸能人が

潜んでいるかもしれない

テレビ局で、

提供されたペットボトルを

飲む……ありません。」

右京はやや大げさに

鼻で笑いながら

手を上下に振った。

「ですが、
それはひとまず
置きましょう。」

仮に、
指紋が一致したことで、
古林美里と柊里香が
同一人物だと分かるのは、
その時のはずです。

しかし、殺害現場で、
運転免許証に記載されていた
古林美里の名前しか
分からない段階で、
柊里香の名が出た。」

「待って下さい。
それでは、捜査陣の中に、」

「捜査をかく乱する
目的を持った、
何者かがいた。」

そう考えるのが
自然でしょうね。」

「まさか、芹沢刑事が」

「ゼロではありませんが、」

彼である可能性は

極めて低いと思いますよ。

芹沢さんは、

伝書鳩に過ぎません。」

「情報を吹き込んだ何者か

急いで芹沢刑事に

確認してみましよう。」

「それよりも先に、

確認しておかなければ

ならないことがあります。」

米沢さん、

もう一度、免許証を

見せて頂けませんか。」

「は、はい。」

米沢は急ぎ足で

証拠が保管してある

段ボールへと足を運び、

「…これです。」

「……………」

間違いありません。

これは、

三か月前に取得された、

本物の運転免許証です。」

「はあ？」

では、古林美里は、
実在した、

ということですか？」

「いいえ、

そうとも限りません。」

尊の混乱を右京は冷淡に遮る。

「運転免許証の交付は、
指定自動車教習所で
技能検定に合格し、

住民登録を行った地域の
運転免許試験場で
試験に通過さえすれば、
交付を受けられます。」

「お言葉ですが、
その際に、住民票と、
その他一つ、身分証明書が
必要となります。」

「ええ。しかし、
住民票に登録する名前を、
変更することは可能です。

例えば、正当な理由を下に、

家庭裁判所に申請し、
許可されれば、
新たな名前での
住民票登録は可能ですし
それと元にした
運転免許証の登録も
やはり、可能です。」

「そんな…。」

「あくまで
可能性に過ぎませんが、
検討してみる価値は
あると思いますよ。」

なにしろ、
あの芸能記者達が、
全く足取りを
掴めていないのですから。」

「って、待って下さい。
三か月前。」

右京は莞爾とほほ笑んだ。

「そう。
柊里香が、テレビに、
出始めた時期ですよ。」

第7話

「おまえらが
捜査一課に持っていった、
偽札の件、
捜査二課と、うちで
捜査することになったぞ。」

特命係に戻った二人を迎えたのは
またしても角田課長であった。

「おや。
組対五課と共同捜査ですか。」

「ああ、
中園参事官の差配だそうだ。」

「え、中園参事官は、
二課に捜査権を
移したんですか。」

「いいや。
もともと、偽札のヤマは、
二課が追っていたんだと。」

『一課は殺人事件の捜査に
ひきつづき全力をあげる』
だってさ。」

スーツを飄々と
肩に絡げた角田は、
そのまま自分のデスクへと
直行した。

「なるほど。」

筋は通っていますね。

捜査一課はさぞ、

がっかりしたでしょうね。」

意地悪い尊の笑みに、
右京は微苦笑を禁じ得なかった。

「組対五課が関わるとなると、
暴力団が関係している…。」

「そう、黒衛商事。」

うちが追っていた

新宿一帯を荒してる

ヤクの前締めだよ。」

質素で機能的な課長席に
備え付けられたパソコンに、
黒衛会の情報が並ぶ。

「…指定暴力団八山会の
フロント企業ですね。」

…北高麗共和国とも

貿易関係があります。」

「ああ。

捜査二課は、偽札が

北高ルートから

流れてきたものと

見立てている。」

「危険ですねえ。」

右京はモニターを見ながら
いぶかしんでいる。

「北高麗共和国に対し、
日本政府は
経済制裁を継続しています。」

北高麗との取引があれば、
それだけで様々な政府機関、
民間団体から監視を受けます。

指定暴力団のフロント企業は、
民間企業より遥かに
コンプライアンスを
重視します。

これではまるで、
要らぬ揉め事を
抱え込んでいるようでは
ないですか。」

「そうかい？」

それだけ、偽札が儲かる、
ってことじゃないの？」

少しいらいらしながら、
角田は顎を伸ばして、
右京を難じる。

「すみませんねえ。

細かいことが気になるのが
僕の悪いクセです。」

「麻薬の仕入れルートは？」

「ああ、福豊省。

俺達はそう読んでは」

「なるほど。」

「北高麗の

偽札ルートを扱いながら、
福豊省の

麻薬仕入ルートも扱う。

二十人前後の

フロント企業にしては、
商圈が随分手広いですね。」

「あんだねえ。」

「失礼。

ですが、課長の邪魔は

していませんよ?」

「そういえば、
杉下さんの疑問は、
組対五課ではなく、
捜査二課に関連している
ものばかりですね。」

顎に手をあてながら、
右京の指摘を整理する尊。

「あ、ああ。
でも、捜二とは
合同捜査なんだよ。」

「分かりました。
神戸君、
行きましよう。」

「ええ?
どちらへ?」

尊には答えず、
右京は来たばかりの特命係を
後にする。

「おい!
なんか分かったら
捜二の前に、」

「もちろん、
真っ先に課長に。」

角田は親指を立て
笑顔で二人を見送った。

第8話

「ふもつ。

もうそこまで

たどりつかれましたか。

流星ですのお。」

新宿高層ビル街下の

一流ホテルラウンジで、

熊野は苦笑しながら

昼食三食分に匹敵する

コーヒーに口をつけた。

「フロントまでは良く来るが、
入るのははじめてじゃの。」

「ご心配なく。」

先日のお礼ですから。」

「でもって、

完璧に我々の自腹です。」

尊の苦笑が熊野に移る。

「なにぶん、

我々が、勝手に捜査

しているだけですからねえ。

捜査費として

落とすわけには参りません。」

「ふおおおおお。」

本庁にも、

いろんな人が

いるもんじゃの。」

熊野が身体を揺すって笑う。

「ところで、熊野警部。

そろそろ、

お話頂けませんか？」

右京は、

あくまでも軽い調子だった。

「？ なんですかの？」

「どうして、淀橋署は、

田尻副署長を

庇っておられるのか。」

「…!!」

「ええ？」

二者二様のリアクションを

無視するかの如く、

右京は淡々と語っていく。

「田尻副署長は、

本庁から派遣されている
キャリアです。」

表現が些か

直截に過ぎますが、

淀橋署にいらっしゃる

皆さんにとつて、

御神輿の一体に過ぎません。

にも関わらず、

淀橋署の皆さんは、

田尻副署長を一丸となつて

外部から守っている…。」

右京が、ゆつくりと、

噛んで含めるように

話している間に、

尊は、淀橋署での、

一連の出来事を思い返していた。

「…確かに、

受付から現場の刑事、

そして熊野警部に至るまで、

田尻副署長の話をした途端

警戒感を剥き出しに

してきました。

…そして熊野警部、

貴方が我々に

接触しているのは、

我々を通じて、本庁の

動きを見極めるため、

…そういうことですね。」

熊野は、思案顔に暮れ、腕組みを解こうともしなかった。

右京は、顔を近づけ、熊野が閉じている扉をこじ開けるように囁いた。

「熊野警部。

…我々を信頼して頂けませんか？」

熊野は、しばし、自分に似つかわしくない豪華なシャンデリアを見上げていた。

「……………皆、英治が可愛いんじゃないよ。」

ぼつり、
ぼつり。

「『キャリアの墓場……』、

そんなところに来るキャリアってのは、
本当にろくでもない奴が多くての。」

貯め込んでいた憤怒を、
ゆっくりと
吐きだしていく。

「捜査はしない、
書類仕事は増やす、
文句は言う、
手柄があれば自分、

でも、責任は我々、
前線に立つ捜査員。

そういう輩が、
随分多かつたんじゃない。」

「全員ではありませんが、
中堅段階で
振り落とされるキャリアは、
人間として問題を抱えている
ケースもあると聞きます。」

「杉下さんが言うと、
なんか妙に、
説得力がありますね。」

右京が物凄い顔で尊を睨む。
幸い、下を向いていた熊野に
見えることはなかった。

「そういうキャリアに、
嫌気が指していた頃に、
英治が来たんじゃない。」

まだ28でのお。

ワシにとつては、

孫のような奴じゃよ。

階級は遙かに上なのに、
誰に対しても年齢相応に
礼儀正しく接してきたの。

なにしろ頭は切れる。

しかも、

自分から率先して
捜査に乗り出す。

その上、

常に捜査員のことを
第一に考える。

手柄があつても、
己には帰さない。

少々無鉄砲だと、
ワシが思った捜査も、
捜査員全員の結束と、
思わぬ気付きに基づくと、
高い捜査指揮能力で、

忽ち解決してしまう。

…皆、あいつに
魅せられてしまったの。」

熊野は、遠い目をしながら
過去を振り返るように
田尻警視を褒め称えた。

しかし、右京は、
熊野の称賛の中に秘められた
苦い響きを見逃さなかった。

「田尻警視は、
ある犯罪組織と
コンタクトがあった、
…事実ですね？」

「杉下さんっ！」
大河内首席監察官が
他言無用と念を押しした情報を
ここぞとばかりに
開示した右京に、
尊は叫び声を上げた。

「いや、違う。
…信じて貰えんかも
しらが、英治は、
内通者を作るのが

「上手かったようじゃ。」

「内通者…ですか。」

「そうじゃ。」

組織を捜査する前後、
英治は良く、どこかに
消えていたんじゃ。

おそらく、

我々にも内緒で、
内通者と
逢っていたんじゃろう。」

「捜査員は、
田尻警視の行動に、
気付かなかったんですか？」

「薄々は気付いていたろう。
じゃが、英治は、
人使いの上手な奴じゃ。」

無駄なく、
必要な大量の仕事を
的確に捜査員に割り振り
手一杯にしてしまう。

捜査員は英治に
心酔しているから、
英治に振られた仕事を、

英治に認めて貰うために、
懸命になるんじゃないよ。」

「そうすると、」

田尻警視は…。」

「捜査員の誰にも

監視されない、

自由な時間があった…、

そういうことに

なりますね。」

ところで、熊野警部。

もう一つだけ、

お聞きしたいことが

あるのですが。」

伸ばした人差し指に

顔を近づけ、

右京は眼を輝かせて

熊野を見つめる。

「なんじゃろう?。」

「熊野警部が、」

紙幣偽造事件の捜査状況を

「ご報告された、警視庁の部署は

どちらでしょうか?。」

「…捜査二課の
小泉警部じゃが？」

「え、特捜一三係の
小泉徹也警部？」

「ご存じですか？」

熊野と右京の視線を
一身に浴びた尊は、
顔を顰めながら
苦し紛れに口の端を
わずかに上げる。

「ええ、まあ。」

第9話

「まだ、僕が
警察庁にいた頃の話です。」

尊はハンドルを握り、
道路正面を見ながら、
隣にいる右京の問いに
応じていた。

「警察学校の同期会に来ていた
ある、女性警官と、
偶然、再会しました。」

その娘は、可憐な顔立ちで、
警察官にはあまりいない、
フェミニンなタイプでした。

憧れから警察官採用試験を受け
合格はしましたが、
もともと引つ込み思案で、
集団生活にも
馴染めないタイプでした。

僕は知りませんでした。が、
学校を脱走するしないで、
揉めたこともあるそうです。

そんな彼女が、
その日ばかりは、
二次会、三次会まで、
僕らと付き合って
飲んでいました。」

尊の若干荒い運転に、
眉を顰めながらも、
右京は黙って
シートベルトを握っている。

「帰り道が一緒だったので
僕が彼女を送っていく
ことになりました。」

深夜、零時でした。
彼女が僕に告白したんです。

上司に、かなり激しい
性的ないやがらせを
受けていると。」

「セクシャルハラスメント、
ですね。その上司が、
小泉徹也、ですか。」

「…ええ。」

尊は唇を噛みしめていた。

「で、
それを聞いた君は
どうしたんです？」

得意でもない飲み会に出て、
深夜まで君を待っていたのは
彼女にとって、君だけが頼り
だったのでしょうか？」

右京の眼が冷徹に光る。

「正直言って、困りました。
何しろ所属している
組織自体が違いますしね。

同期のネットワークを
使おうとも考えましたが、
彼女に止められました。

いろいろ考えた末、
彼女には内緒で、
正攻法で行こうと。」

「内部告発、ですか。」
「僕が調べた限りの
事実関係を書いて、
私信として
監察官にお送りしました。」

「それは、何年前ですか？」

「そうですね。」

五年くらい前だったかな……」

「まだ、君が、」

FRSの主担になる

前のことですね。」

「ええ。」

「私信の送り先は、」

大河内監察官ですね。」

「……はい。」

「なぜ、大河内さんに、直接

お逢いしなかったのですか？」

「警視庁へ出向している

大河内さんに、

警察庁に出向している、

僕が逢うと、お互い、

面倒になると考えたんです。」

「……君の頭の中は、」

警察庁での日々で

一杯だった、

ということですか。」

右京は些か酷薄に呟いた。

尊は、身動きもしない。

「大河内さんからは、
この件で何か、
返答を貰っていますか。」

「…いえ。何も。」

「そうですか。」

彼女はいま、どちらに?」

「…分かりません。」

警察を、辞めたそうです。」

探しあぐねるかのように
単調な言い回しで、
言葉を絞り出す尊。

「そうですか。」

…後悔していますね?」

「…はい。」

「わかりました。」

とりあえず、
警視庁に戻りましょう。
調べないといけないことが
増えたようです。」

「…え?」

まさか、杉下さんは、
この件が何か、
今回の事件に
関係があるとでも？」

「まだ分かりませんが、

…あ、急いで下さい。」

「あ、はいっ。」

第10話

「なにしにきたんですか？」

伊丹先輩と三浦さんなら、
捜査に出ていますけれど。」

芹沢はパソコンを見たまま、
いささか間のびした声で
右京達に応対した。

「で、芹沢さんは
書類仕事ですか。」

「あの二人、書類仕事
全然手伝わないんですよ。
出さなきゃ上に怒られるの
俺なのに。」

「正確な記録を残すことは、
大切なお仕事ですよ。」

芹沢の不満を受け止めながら、
右京は、やんわりと
本題に斬り込む。

「ときに、」

古林美里が、柊里香だと
芹沢さんが気付かれたのは、
いつだったでしょう？」

「ああ、殺害現場を
検証している時に、
廊下に転がっていた財布から
免許証を見つけたんですよ。」

芹沢はパソコンから眼を離し、
右京達に向き直った。

「え、現場でなくて、
廊下に転がって
いたんですか。」

「あれ、言ってますん
でしたっけ？」

かなり重要な情報を、
あっけらかんと言う芹沢。

「神戸君。我々も
その点について
聞いていなかったのですよ。」

「そっか…。
捜査記録も、まだ芹沢さんの
パソコンの中ですからね。」

「では、免許証を
見つけた後のことを。」

右京が先を促す。

「あ、はい。

で、免許証を見た時、
所轄の刑事が
のぞき込んできて

『これ、

柊里香ですよ!』

って言うもんだから、
改めて見直したら、
あっ! って。」

芹沢は大きな眼を見開いて
身ぶり手ぶりで
話しはじめた。

「それで、

伊丹刑事のところに
急遽報告に

いったんですね。」

「ええ。

そしたら、

警部殿達がいて…」

芹沢は不満げな顔をしたが、
当の右京達の前であることを
思い出し、慌てて引っ込めた。

「なるほど。ちなみに、
現場の所轄署は、
淀橋署ですね？」

「あ、はい。」

「柘里香だ！ と叫んだのは
どなただったか、
覚えてらっしゃいますか？」

「さあ……。」

「もういませんでしたから。」

「おやおや。」

「僕が現場に入った時には、
芹沢さんと伊丹さん
だけでしたからね。」

「妙ですねえ……。」

「確かに。」

「柘里香であることを、
真っ先に発見したのに、
現場をすぐに
立ち去るなんて。」

「いえ、そこではなく。」

「…僕も、米沢さんに
連れられて、階段をのぼって

現場に入ったのですが、
その際、所轄署の捜査官と
すれ違っていませんよ。」

「え…。」

「現場はかなり、
狭い雑居ビルでしたね。」

「はい。階段は
僕らが使った
一つだけですし
エレベーターも
壊れていましたね。」

「ええ。
もし、エレベーターが
動いていれば、
我々も階段など、
使わなかったでしょう。」

「ってことは…。」

「これは僕の
勝手極まる想像ですが、

彼は、芹沢さんに
柊里香の情報を告げた後、
ビルのどこかに、
隠れていたのでは

「ありませんか？」

「えっ！！！」

「我々が調べていたのは、
専ら殺害現場と
その周辺だけです。」

例えば、あの時、
建物の外に備えられた
非常階段を
調べてはいません。」

その気になれば、
隠れられそうな場所を
探すことは、
そう、難しいことでは
ないと思いますよ。」

「ちよ、

ちよっと待って下さい。」

もしそうであれば、
芹沢さんに情報を告げた、
所轄の人間って…。」

右京は、
背中に当てていた手から、
人差し指を立て、
芹沢の正面を向いた。

『柊里香を
殺害した、犯人。』

「ええええええっ!!!」

「…の、可能性もあります。」

無論、ただの僕の想像です。

その人物が、

どういう形で今回の事件に
関わっているか、

主犯なのか、従犯なのか、

そもそも誰なのかも

全く分かっていません。

第一、今のところ、

何の証拠もないのですよ。

状況証拠を繋いだけけです。」

「…でも、そうなれば、

芹沢さんの、責任が…。」

「ひっつ!!!」

心底怯えた顔をする芹沢。

「大丈夫です、

芹沢さんが、

犯人を逮捕さえすれば、

何の問題もありません。」

笑顔で接する右京が、
怯えきつた芹沢には
菩薩に見えていたのか、
必死に手を合わせていた。

第11話

「で、今度は、何の用だ？」

日比谷公園内にある
カフェテリアで、
大河内は尊を詰問した。

「え、厭だなあ。」

お茶をご一緒したい、
それだけですよ。」

「嘘をつけ。」

お前が俺を呼び出す時は、
俺に何か

頼みごとがある時だ。」

「あ、グサつときた。」

そんなんじゃ
ないんですが。」

「じゃあ、何だ。」

尊は、真剣な眼差しで、
大河内と対峙した。

「単刀直入に伺います。
捜査二課の

小泉徹也警部、
「ご存じですよね。」

「…ああ。」

無表情に頷く。

「五年前、僕が、
大河内さんに、
お手紙を書いたんですが、
…読んで頂けました？」

「ああ。」

「よかった。
届いていないのかと
思っていましたよ。」

「そんな嫌味を言い
お前は態々
私を呼び出したんじゃない
あるまい。」

「ええ。」

「…調べました？」

「ああ。」

監察官聴取した結果、

確かに、
そういう事実があった。

性的に重大な帰結を齎す
諸行為に及んだ、
と考えられる。」

「…考えられる？」

大河内一流のまどろっこしい
言い方以上に、
事実認定をしない態度を
責める尊。

「辞職した本人、
小林茜元巡査部長は、
我々の聴取を拒否した。」

「……っ。」
大河内は淡々と、
事実関係を述べる。
尊に対する言葉に、
嘘はない。

「もう関わりあいに
なりたくない。
もう、遅いから…。
その一点張り
だったそうだ。」

嘘のない言葉は、
時として残酷である。

「……………いま、彼女が、
どこにいるか、
分かりませんか？」

「それを知ってどうする。」

大河内は冷酷に突き離れた。

「……………分かりません。
でも、僕は、
何もしてやれなかった。」

「……………用件はそれだけか。」

大河内はすつくと立ち上がった。

「大河内さん！」

眼を赤く腫らした尊に
見つめられた大河内は、
暫し尊を見つめると、
踵を返して去っていった。

暫し呆然と佇んだ後、

「……………」
僕の無様な姿を見て、

満足ですか？」

独り言のように呟く。

「そんな趣味が

あるとでも思えますか？」

「いいえ。

杉下さんは、

人間に興味の

ない人ですから。」

不貞腐れたように

入れ違いに入ってきた

右京に言葉を投げ捨てる。

「君は、大河内監察官が

何もしなかつたと

思っているのでしょうか、

それは違います。

現に、監察官聴取以降、

小泉徹也の

昇進スピードは

遅くなっています。

何より、

大河内監察官は、

この一件を、

記録に残しています。

異動の際ごとに、
人事情報として

この履歴が参照されます。」

「つまり、

人事記録に残すことで、
小泉徹也の出世を
遅らせている…。」

「それが、

大河内監察官なりの正義であり
君への愛情ですよ。」

人間に興味のない右京が、
尊に愛情を説いていた。

「でも、それじゃ、

彼女は、まったく…。」

「ええ。その通りです。

しかし、これで一つ、
分かりました。」

「…なにがです?」

「その前に、もう一つ、
確認しないといけません。

神戸君、

車を出して下さい。」

「え、あ、はい。」

「いま教えては
くれないんだ……」

第12話

「殺害現場から、
ルミノール反応は
出ませんでしたね。」

新宿区内の雑居ビル

殺害現場とみられる室内には
右京、尊と、
右京に呼び出された米沢の
三人が立っていた。

「ええ。絞殺でしたからな。」

「そして、絞殺後、
この窓から投げ出されて、
後頭部に損傷を負った。
落下現場では、
ルミノール反応が
ありますね。」

「はあ。そうなりますな。」

長年右京の捜査に協力している
米沢も、右京の真意を
はかりあぐねていた。

「となると、奇妙ですねえ。」

「は？」

「なにがです？」

「絞殺した時点で、
被害者は既に
死亡しています。」

死亡している被害者を
どうして外に
投げ出す必要が
あったのでしょうか。

死体をあの窓から
投げ出す、
ということになれば、
女性の身体であつても、
遺体を持ちあげなければ
なりません。

その際、遺体に、
髪の毛など、犯人を特定する
証拠となるものが
付着しないと限りません。

遺体を投げ出す際、
あの窓の異変を、
第三者に気付かれてしまつ
リスクもあります。

何より、

遺体を投げ出した瞬間
巨大な落下音が響きます。

犯人は通常、

殺害を犯してから、

証拠隠滅やアリバイ工作、

今後の対応などを含めて

時間はいくらあっても

足りないくらいです。

当然、発見されるのは

遅ければ遅いほど

良いはずです。」

狭い室内を左右に

動きまわりながら、

腕の上げ下げで

リズムを取りつつ、

右京が説明を歌っている。

「自殺に見せかける、

というのはどうでしょう。」

右手をあげて尊が質問する。

「仮にそうであれば、

絞殺時点で、

絞殺に対応した偽装工作

例えばロープ状のもので

絞め殺しておいて、

ロープを残しておく
などのほうが効果的です。

それに、この現場には、
遺書がありませんでした。
そうですね？」

「おっしゃるとおり。
遺書などは
発見されていません。」

「従って自殺に見せかける
偽装工作が行われた
形跡は、
ほとんどありません。」

むしろ犯人は、
これが殺人である、
ということ
印象づけたかったのでは
ないでしょうか。

と同時に、遺体を
外に放り投げる、
というのは、
遺体のある状態を
隠すためだった
のではないのでしょうか。」

「ある状態？」

「それをこれから、
調べてみましょう。」

そう言うと、

右京は室内右端の
大型ロッカーに
俊敏にかじりつき、
一人で動かそうとする。
慌てて尊と米沢も手伝う。

「よーしよっ

よーしよっとー！」

栄養ドリンクの
広告宣伝を彷彿とさせる
三人の協力によって
ロッカーを真ん中に
移動させた直後、

「米沢さん。」

息の切れた右京が
米沢に指示する。

「ここに、

ルミノールテストを
お願いします。」

「りよ、

りようかいしました。」

息を切らしながら
米沢が鑑識七つ道具を
取り出し、ルミノール溶液を
塗布していく。

右京が目配せをすると、
尊は室内の電気を切断し、
遮光カーテンで遮った。

「……あ。」
「なんと……。」

ロッカーのあつた場所が、
青白い光を帯びた。

「杉下さん、これ、
……どういうことでしょう?。」

右京の眼がにわか光った。
尊の問いには応じず、
部屋入り口のドアを開け放って
駆け出して行く。

「……わけわかんない
人だなあもう!。」

舌うちしながら
右京の後を追う尊。

嵐が去った後、米沢は
一人取り残されて、
おろおろしていた。

落語の出囃子が鳴る。

「はい。米沢です……」

あ、杉下警部???

ああ、え、非常口?

はい。はい。」

第13話

駆け続ける右京に、
最近運動不足の尊が
ようやく追いついたのは、
尊の車の前である。

右京は時計を見ると、
にっこりと微笑を浮かべた。

「いきましょう、神戸君。」

「は、はい。」

…な、なんだったんだ。」

車中の人となった
右京の胸から、
シンプルな電子音が鳴り響く。

「杉下です。」

…これは、熊野警部。

…はい、はい。

すぐに伺います。」

「…どうされました？」

「…田尻英治警視が、
姿を消したそうです。」

「はあっ?？」

「お二人だけ、ですな？」

熊野が指定した場所は、
吉祥寺界隈の外れ、
閑静な住宅街に溶け込む、
ワンルームマンションである。

「ええ。こちらは、

田尻警視のご自宅ですね。」

「うむ。」

重々しく頷く熊野。

「休暇中の警視と、
連絡が取れなくなった
そうですね。」

「そうじゃ。」

心配そうな顔つきの熊野。

「警視はどちらに
いらっしゃったんですか？」

「それは…、すまんのう。」

「熊野警部！」

「神戸君！」

殆ど同時に、違う人間に向かって二人が叫んだ。

自らの叫びの後に、

尊は右京の静止に気付く。

「熊野警部は、

我々に田尻警視の部屋を

家宅搜索しても良いと

仰せなのです。

「急ぎましょう。」

「は、はい。」

田尻英治の部屋は、

本人の性格を示しているのか、

極めて几帳面に

整理整頓されていた。

尊が英治の

デスクトップパソコンを開き、

OSを立ち上げようとし、

首を振る。

「………消去されています。」

右京は見向きもせず、
田尻英治の部屋にある
引き出しという引き出しを
全て明けまくり、
異様な早さで
中身を確認していく。

机の三段目の引き出しを
開けた時、

「おや。」

「…なにか？」

改めて二段目の引出しに、
眼をやり、
両者を見比べる右京。

そして、

ベリッ！

「な、なにするんです…
……つて、あ。」

引出しの板の下が破れ、
中からメモリースティック
が出てきたのである。

「…これは…。」

「本庁に戻って、
確認してみましよう。」

尊にメモリースティックを
手渡したかと思うと、
本棚の本という本を
手当たり次第に荒している。

「…空き巣の入った
後みたいになってるなあ。」

右京の手が、止まった。

「…なにか、
気になるものでも？」

右京は黙って、
一枚の複写資料を
尊に手渡す。

「……………あ！」

尊は、眼を丸くした。

「君が、
大河内監察官宛に送った
小林茜巡查部長に対する
小泉徹也警部の

性的嫌がらせに関する
上申書の複写物ですね。」

冷徹に右京は言った。

「私信なのに、
どうして…。」

「大河内監察官が、
田尻警視に
情報提供したとしか
考えられません。」

それより、田尻警視は
どうしてこの情報を
調べる必要があったのか
そちらのほうが
気になりますねえ。」

上申書のコピーに
呆然と目を落としている
尊を尻目に、右京は素早く
ユニットバスの
ドアを開け、
白手袋を排水溝に突っ込む。

そして、

「……おや。」

いぶかしむ顔をしながら
採取した髪の毛を
人差し指で長く垂らし、
眼鏡ごしに凝視する。

「…どうか、しました？」

中腰の右京を

バスユニットの外から
覗き込んでいる尊。

右京は振り返らず、
髪の毛を眺めながら
小声で呟いた。

「…少々、長いですねえ。」

「は？」

「ところで、神戸君。」

「……はい？」

右京は、中腰のまま
尊に振りかえった後、
爽やかに微笑した。

「君に、うってつけの

「任務があります。」

第14話

翌日の朝。

警視庁、特命係。

「おはようございます。」

やや不機嫌そうに尊が挨拶する。

「おはようございます。」

朝のティータイムを楽しむ
右京が、淡々と応じる。

「行ってきましたよ。」

指定されたクラブ。」

「ご苦労さまです。」

「僕にうつてつかけの任務が、
こういうことばかりなのは、
些かどうかと思いますが。」

…まあいいや。

確かに、杉下さんの
見たて通りでした。

三か月前から、

柊里香に似た女性が

雇われたかと思うと
一週間前には、
いなくなっています。

仕事は週に二日、三日程度。
バイト感覚だったようです。

ただ、無口だったり、
饒舌だったりと、
感情の起伏が
激しかったようです。

「なるほど。」

「それと。
黒衛商事の幹部連中の
写真も見せてみました。」

そう言って、
尊は五枚の写真を並べる。

「このうち、
棚橋昌哉だけが
この店の客で、
柘里香似の女性を
指名していたそうです。」

「捜査二課の情報によると、
棚橋は黒衛商事の中で、
北高麗ルートを

担当していたようです。」

「それなんです、
棚橋について、
妙な情報がありました。」

「とうとう?」

尊はもう一枚の写真を
右京の前に出す。

「柳英九

角田課長からの資料では
福豊省ルートの
相手方と

見られていますね。

逢っているんです。
棚橋が。」

「やはり、そうでしたか。」

「え?」

「杉下警部!」

資料を携えて
米沢が入ってくる。

「まず、残念な

ニュースからです。

例の現場ビルですが、
非常口からは、
指紋は一切検出
されませんでした。」

「そうですか。
全て、拭きとられた
のでしょうか。」

「仰せの通りです。
それと、
田尻警視の部屋にあった
パソコンですが、
専用ソフトで
全てデリートされて
いました。」

「そうですか。
几帳面な性格の
彼らしい話です。」

「そして、これも、
考えようによっては、
残念なニュースかも
しれません。」

「なんです？」

「……ごらんください。」

米沢がクリップボードに
止めた資料を、
震える手で尊に渡す。

「はい……」

……え

……

……

……

「……！！！！」

「遺体から採取した指紋が
職員データベースと
一致しました。」

『……小林茜。』

「元、巡査部長です。」

『98%の可能性で
一致する。』

「……。」

じゃあ、

柊里香は……。」

「遺体の確認を怠るから
こんな基本的なことにも
気付かないのですよ。」

冷酷に過ぎる右京の鞭は、
尊を容赦なく打ち砕いた。

「……………どうして。」

「それは、
これから調べなければ
なりません。」

突き離すように言った後、

……………君は、
捜査に参加しなくても
いいですよ。」

いたわりなのか、
残酷なのか。

「……………いえ。」

決然と、尊は言った。

「これは、
僕の事件です。」

右京は暫く、

尊の眼を射抜くように
見つめた後、

「そうですか。

では、

「これを御覧下さい。」

右京は椅子を廻し、

自らのコンピュータ上に

尊を迎えた。

後ろから米沢も覗き込む。

「これが、

警部が見つけたという

例のメモリースティック

ですな。」

「ええ。」

こなれた手つきで

ディレクトリを開き、

ファイルをクリックする。

「……………あー！」

「……………これは。」

尊と米沢が

共に感嘆の声を挙げた。

「黒衛商會が

取り扱っている
麻薬取引の
具体的な日時、場所、
それと、

別の画像ファイルを開く。

「取引現場写真です。
映っているのは、
棚橋と、」

「柳っ!?!」

「な、なんと
鮮明な画像でしょうか…!」

「で、でも、田尻警視は、
偽造紙幣事件を
追っていたのでは
ありませんか?」

慌てて尊が手を挙げる。
右京はそれには答えず、
次のファイルを開く。

「神宮寺三郎様……?」
誰です、これ?」

「なんと!」

米沢が感嘆の声をあげる。

「あれ、米沢さんは
知ってるんですか？」

興奮気味の米沢は
舌を締めさせながら喋った。

「ご存じないのですか？
あの、探偵Jですよ！
SMC事件の！」

「あ、実在したんですね。」

他人ごとのように呟いた尊は、
ビクッと身をよじる。

「って、熊野警部の
『繋がり』って、
まさか……………」

右京は悠然と紅茶を啜る。

「その、
まさかでしょうね。」

第15話

「ホントにいいの？
ええ??？」

組織犯罪対策5課長、
角田六郎は、
長い顎一杯に驚きを表現した。

「もちろん。
真っ先に、課長にという
お約束でしたからね。」

善意の大口募金者の如き
鷹揚な態度を見せる右京。

「へっへ…、
いや、なんか、
いつもいつも悪いねえ。」

これ以上ない確実な証拠を
労せずを得て、角田は
喜びを隠そうにも
隠しきれなかった。

「ところで、捜査二課が
進めている偽札の件ですが、
進展はありましたか？」

「ああ。」

合同捜査会議の後、
週明けには、黒衛商事を
ガサ入れできる、って
意気込んで報告してたよ。

我々も、これを下に、
令状を請求すれば、
週明けに入れるって
わけだ。」

角田は上機嫌を隠さずに
身体をゆらゆら揺すっている。

「でしたら課長。」

「ああ、何だい？」

歌いだし兼ねない様子の角田。

「我々も、検拳に
ご協力したいと思うのですが
いかがでしょうか？」

「え、同行させろってこと？」

「ええ。」

右京は笑顔を貼りつかせたまま
答えの分かっている

お願いごとをする。

「うーん……。」

ま、いいんじゃない？

うちはいつも、

人手が足りないからさ。」

ちよっともったいぶったが、
結局、角田は大きく頷いた。

「感謝致します。」

「いやいや、

なんのなんの。

じゃ、俺ちよっと

捜二に伝えるから。」

そう言うなり、角田は、
ほろ酔い加減の
新橋サラリーマンよろしく
千鳥足気味に去っていった。

「…捜査二課には、

どついう証拠が

あるんでしょうね？」

特命係に戻りしな、

尊が右京に

小声で疑問を呟く。

「どうでしょうねえ。
そろそろ、
分かる頃なのですがねえ。」

「は？」

右京の胸ポケットから
電子音が鳴る。

「失礼。」

……………杉下です。

……………ええ。

……………そうですか。
すぐ、うかがいます。」

親指で携帯電話を
しっかり切った右京に、

「どちらからです？」

興味を隠さない尊が尋ねる。

「米沢さんです。
どうやら、例の映像が
見られそうですよ。」

鑑識課で待っていた米沢は、
笑顔で右京、と尊を迎えた。

「私の知り合いの
アイドルオタクに
頼みまして、
知り合いの知り合いのツテで
外注会社に眠っている
某番組の収録生画像を、
動画にして貰いました。」

「つて、また危ない橋ですね。」

「私が集めた
キー局、ローカル局全ての
過去五年間の
お天気お姉さん動画が入った
DVDとバーターです。
安い買い物でしょう。」

「は、はあ。」

満面の笑みを浮かべる米沢を、
ただ呆然と見つめる尊。

「肝心な部分だけを
私の独断と偏見で
編集してみましたので、
どうぞ、ご覧ください。」

そう言うと、米沢は、
動画ソフトをクリックした。

「…不鮮明な画像ですね。
音声も流れない。」

「なにしろ、
加工前のデータです。」

音声は何者かが
持ち去ったそうです。」

「あ！ 柊里香……………」

ソファ席の向こうに、
柊里香が占星術師の姿で
座っている。

「……………」

「なんで、
気付かなかったんだろう。」

「間違いなく、
小林茜さん、ですね。」

容赦なく、傷を抉る右京。

「……………」

使っている化粧品や、
ファッションの趣味は
全く違いますが……………」

「占われている方の顔は
分からないんですか？」

「残念ながら。
なにしろ、

柊里香の画像だけを
映すための
アングルですて。」

「あ！」

……立ちましたよ。

里香の顔が
見えなくなりました。」

「相当御腹立ちだった
ようですねえ。」

「え………」

あれ？

里香がいませんね……

……折角の映像ですが
これではなんだか
よくわかりませんよ。」

失望にとらわれる尊を
右京は右手で軽く制した。

「そんなこともありませんよ。」

この映像を拡大して
彼女が話している部分を
取り出し、唇の動きから
記録を起こすことは
十分可能です。」

「ええ、私もそのように
思いまして
科捜研に勤務している知人に
至急で活字に
起こして貰いました。」

「素晴らしい。」

右京に誉められ、
少し得意気な米沢。
尊は、肩を脱力させたまま

「最初からそつちも
見せてくれればいいのに。」

摩訶不思議な
トーカーを見せられた
不満を露わにした。

それには構わず、歩きながら
A4に打ちだされた
読唇結果を読みあげる右京と、
それをBGMに、
タイミングを見計らって

もう一度動画のプレイボタンを
押す米沢。
尊は慌ててディスプレイに
舞い戻った。

『あなたには
黒い制服の守り人が
見えます。』

あなたは、
神を無くした月の
新月を抱いた日に、

黒い制服の守り人らと
語らっています。』

柊里香の動く唇に、
タイミングピッタリに
アテレコしていく右京。

『改めて見ると、
これって占星術
なんでしょうか？』

『どちらかといえば、
交霊術に近いですな。』

『あなたは
豊かな国から
隠れし命をいただき、

豊かな国から、
隠れし紙を
受け取……………。』

「あ、ここですね。
相手が立ちあがって、
見えなくなってます。」

「相手が
崩れ落ちましたな。
…杉下警部？」

『…僕とすることが。』

右京は激しく痙攣しながら
A4の紙片に
何度も目を走らせた。

「…警部！」
「どうしたんです、
杉下さん。」

「順番に、
考えていきましょう。」

黒い制服の守り人、
黒衛商事でしょう。

神を無くした月

一〇月です。

新月を抱いた日。

一五日でしょう。

豊かな国は、福豊省。

ここまでは簡単です。」

「は、はあ。」

右京に解読されるまで、
全く分からなかった
米沢は、改めて舌を巻いた。

「残っているのは、

隠れし命……

隠れし紙……

これは何でしょう?」

「……そろそろ、

お話頂くときが、

きたようですね。」

「? 杉下さん?」

やおら携帯電話を
取りだした右京は、

リダイヤル先に
親指を入れた。

「熊野警部ですか？
杉下です。」

第16話

西新宿の雑居ビル、
七階にあるバー。

「……あちらに、
いらっしやいます。」

精悍さを笑顔で隠した
黒スーツの男性が、
長身の男を案内する。

長髪をモヒカンばりに逆立てた
不思議な髪形にも関わらず、
目立たない茶色の背広を、
それとなく、品よく
着こなしている。
男を覆う屈強な肉体は、
暴力団関係者を思わせる。

「来たか、神宮寺君。」

「……………」
「意地が悪い真似だな。」

苦笑した男は、
精悍な顔は無表情に保ったまま
熊野の隣にある、
スツールに腰掛けた。

神宮寺の隣に座っていた
眼鏡を掛けた小柄な男性は
杉下右京。

「貴方と、

田尻英治警視との

ご関係は。」

前口上も挨拶もなく、
いきなり、
本題に斬り込む右京。

「……………」

神宮寺は、無言で返す。

「こちらにいらっしゃる

熊野警部は、

貴方呼び寄せるよりも

先に、我々に、

田尻警視宅の家宅搜索を

行わせました。」

「!

道理で何も、

なかつたわけだ…。」

神宮寺は首を振った。

「田尻警視が所持していた情報を、我々より先に、貴方が見つけた場合、田尻警視には、地方公務員法に定められた守秘義務規定に違反することになります。」

田尻警視が
何者かによつて、
犯罪組織への
守秘義務違反を理由に
告発されている状況で、
これはいかにもまずい。
我々が先に知り、
捜査担当部に
情報を渡した上で、

我々を使つて
貴方にお伝えさせたほうが
まだ良いとお考えに
なつたのでしょうか。」

事情を即座に呑み込んだ
神宮寺は、
カミユを口に含み、
胃に流し込んだ。

「……………」
英治の身柄は、

確保したのか。」

「まだ。」

「そうか……。」

ジャズピアノだけが、
ゆったりとメロディを奏で、
三者三様の沈黙を覆っていく。

「あんたも、

英治に似てるな。

随分、無茶をする。」

カミュを呷った神宮寺から、
咳きが漏れた。

歩み寄った神宮寺に、
右京は少しだけ、
冗談めかしながら、
小声で、しかし、決然と言った。

「僕は、真実を知りたい。

それだけです。」

「……………真実、か。」

神宮寺は、両手を組み、
顎を乗せて、

大きな眼を、静かに閉じた。

ピアノの調べが、止まる。

「……」

話して、いただけませんか？
貴方が、
追ってこられた真実を。」

「ああ。」

……少し、長くなるが、
いいか？」

「もちろんです。
神宮寺所長。」

神宮寺は、かすかに苦笑した。

第17話

「……ちょうど、半年前。

俺の事務所に、
一人の女が訪ねて来た。

古林美里、
彼女は、俺に、
そう名乗った。

そして、俺に、
恋人の行方を調べて欲しい、
そう言った。

その男の名は、川上守。

古林美里の恋人で、
佐藤忠商事の子会社、
佐藤忠フードサービスの
社員で、二か月前に
親会社に出向するために
東京に行ったとき
音信不通になったという。

ちょうど

まあ、いつもだが、
仕事も無かった俺は、
古林美里の依頼を、

引き受けることにした。

川上守は、確かに、
佐藤忠フードサービスの
社員だった。

大学を中退した後、
海外で放浪暮らしをしたため
派遣社員の待遇だったが、
能力は高く、やる気もあり、
上司の巡り合わせもあって、
異例の正社員登用を受けた。

だが、それ自体、なにかが
おかしかったんだろう。

子会社から本社勤務。
慣れない東京暮らし。
会議日程を知らせないなど、
陰湿な苛めもあったようだ。

だが、川上は、
持ち前の明るさで、
自分に割り振られた
プロジェクトを
進めることに懸命となった。

川上と最後に
接触していたのは、
福豊省にある貿易会社の

駐在員だが、
どうも、ガードが固い。

俺は、駐在事務所に
忍び込むことにした。」

神宮寺は、
ちらりと右京の横顔を見た。
右京が全く動じないのを見て、
軽く、肩をすくめた。

「駐在事務所内で、
俺は、嫌なモノを見た。

柳英九。

俺は、我が目を疑った。
福豊省が関わっている
貿易公司以、
佐藤忠が取引している、
いわば省を代表する
優良事務所だ。

だが、奴が自由に
出入りしているなら
まっとうな
商売はしていない。

だが、

川上守の足取りは、
ここで途絶えた。

俺は洋子君

俺の助手だが、

洋子君の忠告を無視し、

古林美里に、

調査経過を報告した。

経過報告をした後、

川上守の足取りを

どうやって

掴むかも話した。

それ以来、

美里は、俺達の前からも
姿を消した。

三日後。

川上守の痕跡を掴むため、

俺は、歌舞伎町の

とあるクラブに入った。

間違いなく、

古林美里がいた。

店側の人間として、

その筋の人間に

ぴたりと寄り添っていた。

俺に気付いた、その時だ。

田尻英治達が
踏み込んできたのは。」

「麻薬取引の現場を
押さえようと
したのですね。」

「ああ。
その時、美里が、
人質に取られそうに
なったが、
なんとか助けだした。」

「貴方が、ですね。」

「ああ。」

英治は、俺に何度も
丁寧な礼を言った。

民間人を邪険にしない、
珍しい奴だ、
その時は、それくらいに
思っていた。

その翌日。

英治が、

俺の事務所に現れたんだ。

是非、礼をしたいと。

俺の事務所は、

熊さんに聞かずに、

自分で調べてきたようだ。

英治の企みを知ったら、

熊さんは

止めたるうからな。」

「そりゃあそうじゃよ。

神宮寺君のような人間に

前途有望なキャリアを

そう容易く接触させる

わけにはいかんよ。」

「…こんな感じだ。」

神宮寺のため息を、

右京は微笑で返す。

「英治を気にいったのは

洋子君のほうだったな。

俺とは違って

爽やかな瞳の好青年だ。

弟が出来たようだったよ。

洋子君を通じて、
俺も、英治に少し、
心を許すようになっていた。

その直後、古林美里が、
交通事故に遭遇し、
病院に搬送された。

俺ではなく、洋子君に
連絡が来たらしい。

『これは、警告だ。
次は、ない。』

彼女の携帯電話に
吹き込まれていた
メッセージだ。

俺は、色々考えたが、
古林美里を英治に
託すことにした。

英治は、熊さんと
相談の上で、
警護員を割こうとしたが、

警視庁は、
人員不足を理由に

追加人員を割くことを
拒否した。

これも、いま考えれば、
おかしな話だがな。

途方に暮れた英治は、
大胆な策に出た。

古林美里の顔を、
外部に晒させる。

常時、顔を晒しておけば、
暴力団が狙ってくることは
ないだろう。

最も、この案は、
古林美里の提案らしい。

これも、今考えれば、
古林美里が、英治を
言いくるめていたのだろう。

英治は、
熊さんと相談もせず、
古林美里を変装させた。

『歌舞伎町に
良く当たる占い師が
いるらしい』

たったそれだけの
情報操作のみを武器に、
古林美里は、
柊里香となつた。

そして、確かに、
良く、当たつた。

それは、そつだ。

古林美里、

小林茜は、警視庁で
プロファイリングの
専門家だつたのだから。

質問を繰り返せば、
言葉を投げかけた時の
相手の表情の動き、
嘘のつき方などの
諸要素を組み合わせれば、
相手が知りたいことの
大まかな枠組みは見える。

あとは、標準的な
占星術のフォーマット
さえあれば、
客は納得し、感心して帰る。

柊里香は、見事に客を

だまし続けた。

ちょうど、英治を見事に騙してしまったように。

そして、一か月後。

テレビ局の

外注スタッフが、

柊里香に声を掛ける。

テレビに出てみないかと。

英治の反対を押し切り、

柊里香は、

テレビ出演を承諾する。

ミステリアスな容姿と、

占いに名前を借りた

簡潔、適切な心理解析。

テレビとしては、

使いやすかっただろう。

名を売って安全を得る、

その目的は十分すぎる程、
達せられた。

……あの収録が
起こるまでは。」

「例の、W氏ですか。」

「ああ。」

「…和田誠だ。」

「なるほど。」

上方芸能界の大御所、
八山会とも由来が深いと
聞いています。」

「そうだ。」

そして、八山会こそ、

古林美里

小林茜の、敵。」

「かたき、ですか？」

「…そうだ。」

神宮寺は、一息をつくために、
空になったカミュを頼んだ。

第18話

「あら、あんたひとり？

警部殿は

どこいつちゃったのよ。」

資料を手に、

特命係を覗き込んだ角田は

主の不在という

肩すかしに遭っていた。

「杉下さんは、

捜査に出ています。」

少し膨れっ面の尊。

「じゃ、あんたは

またおいてきぼりか。

信用ないねえ。」

「いいえ。

重要な任務を遂行中です。」

「へ？」

「あれ、

警部殿はいないんですか？

あ、…ども。」

資料を片手にした芹沢と角田は
お互い少し
気まずそうにしている。

「おや、警部殿は不在ですか…
おやおや、皆様お揃いで。」

米沢が特命係に入ったところで
尊は両手を二度叩いた。

「さてと、順番通りに
喋って貰いますよっと。
まず、芹沢さん。」

「は、はあ。」

「黒衛商事北高麗ルート
解明の状況を。」

推薦組時代に培った
押しの強さを前面に出して
芹沢に答えを促す。

「は、はい。
黒衛商事は、北高麗から
蟹を輸入する際、偽造紙幣の
印刷材料となるインクを
入手する予定とのことです。」

「あれ、インクだけ？」

拍子抜けした表情の角田。

「捜査会議では

『証拠を固めた』

って自信たつぷりに
言っただけだから
なんのこつちやっ
て
感じだっただけねえ。」

「ええ。確実な証拠を起点に
身柄拘束を優先するって
聞いてます。」

「そんなんで
令状取れるんかねえ。」

捜二つてな、インテリさんの
集まりなんだろ？

やり方が随分
荒っぽいじゃないの。」

「確かに、不可解ですね。
では、角田課長。」

尊の眼に籠る光が強い。

「お、おう…。」

八山会系のフロント企業だが、
あんたらの言う通り、
福豊省と仲良くなってる。

その元締めはコイツだ。」

そう言うと、角田は
一枚の資料を出した。

「吹石大悟。

……あれ？ って……」

「そう、警部殿とおんなじ
嫌味な大学を出てる。
インテリヤクザの頭目で、
組織の国外進出を
本気で考えてる奴だ。

日本企業が海外進出した際、
海外でのトラブル処理を
請け負うビジネスにも
手を出してやがる。

で、コイツは
八山会内部で国内派と
幾つか衝突を起こしてる。」

「へえ〜。」

芹沢は初耳とばかりに、

間抜けな間投詞を洩らしている。

「でもって、驚いたことに、
公安がこの情報に、
相当アクセスしてる。」

「公安が？」

「なるほど。では次に。」

「あれ、もうちょっと
突っ込んで欲しかったなあ。
って、あんたは
元警察庁のキャリア様だから
もう知ってたってわけか。」

「いいえ。」

「な、なんだよ……。
…現場のビルには
無かったけど、
隣のビルに、
八山会のフロント企業、
……おお、コイツだ。」

角田は
もう一枚持参していた
資料を出す。

「コミッションフーズ。」

「一見、関係なさそうだが、
登記簿を見たら、
分かるだろうよ。」

「おや、

棚橋昌哉といえば。」

「そう、柳と取引してた
黒衛商事の幹部だ。」

「なるほど。」

それは素晴らしい。

では、米沢さん。」

「お、おい……。」

角田のため息を無視しつつ、
腕組みをしながら
尊は米沢に先を促した。

「は、はあ。」

では、失礼して、

私からは三点ほど。」

米沢はクリップボードに
綴じている資料を読み上げる。

「まず、例の柊里香が

出ていた画像ですが、

収録は日読放送、

柊里香のペットボトルを

証拠として提出した局です。」

「例の映像って何だよ。」

初耳とばかりに

興味深々で米沢に迫る角田。

「柊里香がテレビ局内で

暴力団と接点のある

芸能人を占った画像です。

で、二点目は。」

要点のみを些か冷淡に伝えた

尊は、髪をかきあげて

米沢に先を促す。

「そのペットボトルに

付着していた指紋は、

やはり、小林茜巡査部長の

指紋とも一致しました。」

尊は大きく、嘆息した。

「あら、どうしたの

警部補殿。」

意地悪い笑みを浮かべる角田。

「なんでもありません。」

第三点に。」

「有志を募って
現場ビルの鑑識作業を
やりなおした結果、
屋上の手すりから、
興味深い指紋が二つほど
採取されました。
ごらんください。」

「ええと、一人は不明。
もう一人は………」

「!？」

「そう。」

…捜査二課の
小泉徹也警部です。」

「な、なんだってまた…。」

「って、コイツ、
合同捜査会議で自信たっぷり
喋ってた奴じゃねえか！」

角田の驚きが
二人に伝染し、色めき立つ。

だが、

「分かりました。
皆さん、

ありがとうございました。

「ご報告頂いた内容は、
僕から杉下さん
にお送りします。

あ、資料は、
置いてって下さいね。」

冷静そのものの尊は
愛想笑いを浮かべたまま
三人にご退場願う仕草をみせる。

「…なんだよもう。」
不機嫌そうに帰っていく角田。

「確かに、お渡ししました。」
淡々と帰っていく米沢。

「ちゃんと犯人、
つかまえてくださいよお。」

不安がぶり返してきた芹沢。

三者三様の資料を
メールにまとめながら、

「……………」
「あ、あ、んう！」

尊は、
おいてきぼりになった怒りを
改めてパソコンにぶつけ、
突っ伏した。

ぶるるるるるるるるるる

尊の横で
右京宛の固定電話が鳴る。
「はい、特命係です。」

……………え？
猪下……………

ああ、あの時の。
ええ、はい、神戸です。

……………杉下さん？
……………え、偽札の件ですか？

……………えー！！
なるほど……………。

あ、でしたらこちらから
お伝えしますよ。

ええ、ええ。

はい、どうもー。」

電話を切った尊は、
にんまりと笑みを浮かべた。

第19話

「失礼。」

手早く携帯電話を取り出し、素早くメールの内容を確認した右京は、再び、神宮寺に向き直った。

カミュを追加した神宮寺は、

チツ……

煙草の先に火を灯した。

緩やかに紫煙が立ち込めていく。

「小林茜の育ての親は、小林泰蔵。大学教授だ。」

小林泰蔵は、当時、頼まれて養護施設の理事をしていた。

月に一度程度の、非常勤理事、文字通り、名義貸しだったようだ。

だが、ある日。

小林の家に、生後三カ月になる

幼子が棄てられていた。

それが、茜だ。

小林は、

齢五十五歳の独身。

学究にかまけ過ぎて、

婚期はとうの昔に

逸していた。

理事を勤める

養護施設に預ける手も

あつたろうが、

気紛れも手伝つたんだらう、

乳母を一人雇い、

二人で育てることにした。

捨て子ではあつたが、

物質的にも、精神的にも

不自由はしない

生活だった。

だが、小林泰蔵は

茜が12歳の時、講演先で

交通事故により亡くなった。

茜は、遺産を巡る争いに

巻き込まれた。

13歳の時、乳母も亡くなった

茜は、周りに信じられる大人が

いなくなった。
生き延びるために、
人の顔を読むことに
巧みになっていった。

そんな生活が、
プロファイラーとしての
適性を磨いたわけだがな。

警察官という仕事から、
知り得た秘密からか、茜は、
養父の事故死に、
疑問を持つようになった。

そんな時に、養父、小林泰蔵の
弟子を名乗る人物が、
茜に接触してきた。

茜が、その男と接触した頃から
警視庁内で、茜は陰湿な
性的虐待を受けていたようだ。

茜は警視庁を退職し、
職業的に得た知識を使って
戸籍名を変え、
見知らぬ土地で
小林茜の名を捨て、
古林美里としての、
穏やかな暮らしを選んだ。

…だが。」

「穏やかな暮らしを
共に送ろうとした、
川上守の行方が判らなくなり
貴方の事務所の扉を叩いた、
…そうですね？」

「ああ。」

「確か、小林泰蔵教授は
東アジア経済社会がご専門で、
福豊省の経済発展について、
論文を書かれていますね。」

「…あなたはそこまで
辿り着いていたのか。」

右京は少し、苦笑した。

「失礼。」

ただの要らぬ知識です。

もうひとつ。

小林茜に接触した
小林泰蔵教授の弟子とは、
どなたでしょう。」

「王有為。」

福豊省から来た留学生で

佐藤忠商事の社員だ。

この目で確かめたが、
いたって真面目な男だ。
恩師の死に方に納得が
いかなかったようだ。」

「王有為さんはなぜ、
そのように
思われたのでしょうか？」

「遺稿だ。」

「遺稿。」

「小林泰蔵は、日本政府の
補助を受けて
福豊省の人口問題を研究する
チームの主査を勤めていた。」

当時は、改革開放時代だった。
福豊省政府の支援も受け、
人口に関する

「詳細な報告書を書き上げた。」

だが、その対外公表は、
福豊省政府によって
差し止められた。」

「改革の時代が、福豊省政府、
ひいては中央を

揺るがしかねなくなった…
そういうことでしょうか。

となると、王有為さんは。」

「改革運動に、関わっていた。」

「なるほど。」

つまり、遺稿には

差し止められた報告書の

中身が記録されていたと。」

「…講演の演題は、

福豊省の人口問題だ。」

「なるほど。」

右京は大きく頷いた。

「王有為さんは、今どちらに。」

「…福豊省で亡くなったそうだ。

夜釣りに出かけ、

足を滑らせたらしい。」

神宮寺は、

かすかに溜め息をついた。

右京の眼は、

神宮寺の閉じた視線の先に

注がれていた。

「吹石大悟。ご存じですね？」

たったいま

メールで受け取った情報を、
さも前から知っているように、
少し重々しく告げる右京。

「ああ。」

「…神宮寺所長。」

貴方は、

小林泰蔵教授の殺害と、
柊里香

小林茜さんの殺害事件は、
同一組織が関与している、

そう、お思いですね？」

「……………」

神宮寺は、無言で、頷いた。

右京は、

暫く考えをまとめた後、
話を切りだそうとした矢先、

「…黒衛商事は、

今日中に店じまい
するらしい。』

「ふもっ!?!」

熊野のように、
声には出さなかったが、
右京も驚愕を隠さなかった。
興奮をそのまま声に乗せる。

「警察内部の
捜査情報が漏れている、
そう、お考えですね?」

神宮寺は、
無言で、頷いた。

右京は、
素早く携帯電話を
取り出した。

警視庁、特命係。

マナーモードにしたままの
尊の携帯電話が
机でぶるぶる跳ね出した。

「あれ、杉下さん？」

意地の悪い含み笑い。

ぴっ。

「僕に内緒で、

探偵Jに逢ってる

そうじゃないですか。」

開口一番、機先を制して

嫌味を言ってやった

小さな勝利の直後、

「……………え！」

今夜中……………！

わ、わかりました、
す、

すぐ課長に伝えます。

はい、一課にも！」

第20話

警視庁、刑事部捜査一課。

「本当かつ！」

尊のもたらした情報に
三浦、伊丹が反応し、
一課中が尊達に注目する。

特命係で行われた
ミニ合同捜査会議の情報を含め
特命係の捜査状況を
芹沢から伝えられている
捜査一課にとっても、
黒衛商事の棚橋は
今や重要参考人候補である。

「ええ。間違いありません。
黒衛商事は
今日中に解散します。」

「分かったつ。
すぐ令状を取れっ！」

「は、は……」

『その必要はない。』

中園参事官を御供に控えた
内村刑事部長が、
捜査一課に登場した。

「神戸。お前には
事件の捜査権はない。」

「そうだ。また好き勝手に
現場を荒したそうだな。
捜査二課も困っていると
苦情が来ている。」

懲戒処分で済むと思うな。」

「御言葉ですが、
これは、確実な線からの
重要な情報です。
万が一取り逃がしたら、
お二人の経歴も
無傷では済みませんよ。」

「なっ!?!?」

動揺する中園参事官。
だが、もともと経歴が
さほど綺麗ではない
内村は動じない。

「確実な線とは何だ。」

さすがの尊も言葉に詰まる。
探偵」などと言える筈もない。

「答えられないだろう。」

どうせ、特命係が

勝手に調べた情報だ。

そんなものに踊らされて

合同捜査会議で

出した決定を

翻すわけにはいかん。」

「ですが、」

「出ていけと言ってるんだ。

神戸っ！」

「くっ！」

露骨に反抗的な姿勢を

尊が取るうとした矢先、

ぶるるるるる

ぶるるるるる

「なんだっ！！！」

あ、こ、こ、これは

官房長！！！！？？」

電話の前で露骨に恐縮し
腰を折り曲げる

中園参事官は、困惑した顔で
内村に受話器を渡す。

「官房長。

さすがに今度は……

は！？ 公安！？」

警察庁、長官官房室長室。

「そう。

公安もその情報を
持ってて、今から
踏み込むんだって。」

首までを覆う

黒塗りの背もたれを
意味なく廻しながら

小野田公顕は、
無機質なトーンで告げた。

「別にそっちの
捜査会議の方針に

邪魔立てするつもりも
ないけれど、

ま、恥をかかないように
忠告だけはしたってわけ。

あ、そうそう。

長官もこの件、

関心を持ってらっしゃいよ。

じゃあ。」

一方的に切られた電話を
憎々しげに睨みつけた
内村は、

「何をしている。

突入の準備を急げ。」

横にいた中園を

振り向いて告げる。

混乱していた中園は、

その一言で立ち直った。

「何ぼーっとしてるんだ

お前ら！

令状を請求して、

突入準備しろっ！」

駈け出す捜査一課の面々を

横目で見ながら、

尊は髪を一度、かきあげると

そっとその場を離れた。

第21話

コマ劇場跡地から離れた
キャバクラが軒を連ねる
雑居ビルの五階に
事務所を構える黒衛商事。

その周辺を、
捜査陣が陰々と固めていく。

「第一班、第二班、
状況を報告しろ。」

トランシーバーを持つ
角田の眼は、
不思議と落ち着いていた。

ノンキャリアからは
稀有とされる
本庁の課長に登り詰めた
角田の出世を支える
度胸の良さが垣間見える。

「第一班、
配備完了しました。」

「第二班、
配備完了しました。」

「よし。」

俺等は裏口から突入する。
指示あるまで待機！」

「はっ！」

牛井屋チエーンの前で、
捜査員幹部が
鳩首会議をしている。

「全班、配備完了しました。
中園参事官、
指揮をお願いします。」

「わ、私が指揮官？」

「いまいる捜査陣の中では、
中園参事官の
階級が一番上です。
是非、捜査指揮を。」

「え、あ、その、
いや、しかし。」

戸惑う中園に
髪を逆立てた、
眼つきの鋭い私服捜査員が、
細身に赤ネクタイを

締め直し、中園に近づいた。

「大丈夫です、参事官。」

「いや、小泉、
しかしだな。」

「我々が把握している
情報によりますと、
棚橋ら幹部は
地下室で籠城しています。」

地下室に突入させるよう
指揮して下さい。」

自信たつぷりに
作戦を開陳する小泉に、
中園はすっかり安心した。

「お、お前に言われなくても
もとから
そうするつもりだった。」

「…恐縮です。」

小泉の目尻が
僅かに下がった。

中園は、震える手で
レシーバーを握る。

『全捜査員に告ぐ。』

情報によれば、

棚橋ら幹部は地下室で

籠城している。

よつて、全捜査員は、

各々の持ち場から

地下室を制圧。

マル対の身柄を確保。

なお、マル対の抵抗が

激しい場合、

発砲を許可する。』

「地下室だあ？

そんなもの

持ってやがったか。

角田は顎を捻った。

「課長。」

防弾チョッキを

着ているものの

こんな時でも

右京のスーツは

英国仕立てである。

「なんだよ警部殿。」

右京は

角田の耳元に寄り、
耳たぶを触りながら、
二言、三言囁いた。

角田は眼を

白黒させている。

「いかがでしょう？」

笑顔の右京。

「わ、わかった。

あなたの好きにしなよ。」

「恐縮です。

…神戸君。」

「はい。」

カッターシャツの上に

防弾チョッキを

着けた尊が、

携帯電話に手をやった頃、

『全班、突入せよ！』

中園のやけっぱちに
上ずった声が響く。

「課長。」

小松が角田に指示を求める。

「お、おう、

じゃ、警部殿、

俺等に行くぞ。」

「よろしくお願いします。」

右京と尊は、

突入していく組対5課員達を
笑顔で見送った。

「警察だあつ！

動くなっ！」

正面から黒衛商事に
踏み込んだ伊丹達は、
あまりの無抵抗さに
拍子抜けしていた。

「先輩、

もぬけの殻ですよ。」

「ちっ……」

おい、奥へ向かうぞ！」

悪人顔が怒りを溜めると
さすがに芹沢も怖がる。

「は、はいっ！」

捜査一課の捜査員達が、
階段を下って、

地下一階に踏み込もうとした
その時、

『ば、爆弾だっ！！』

血相を変えた捜査員達

組対5課の面々が

次々と撤退していく。

「な、なにっ！！」

「先輩っ！」

「畜生っ、

俺等も撤退だっ！！」

『地下室には爆弾が

配備されている模様っ！』

「な、なんだと？
き、聞いてないぞ、
おい、小泉っ！

……っ。」

小泉警部の姿が見えない。

「な、なんてことだ……。」

応援要請を受け、
警備部から派遣された
仁科係長が天を仰いでいる。

「た、た、

退避、退避っ！！」

「参事官、

ただちに爆発物対策係に
応援要請してください。

それと、

付近の住民に避難勧告、

周辺道路を

封鎖してください。」

「よ、よし、

わかった……

……っ、神戸っっ！！」

「参事官っつー!!」

「お、お、お、

おまえがいったんじや
ないからなっ!」

半狂乱になりながらも、
中園は尊の指示に従った。

それを見届けた尊は、
警備部の仁科係長に
目配せを送った後、
携帯電話をかけながら
駆け出した。

「もしもしっ!」

「杉下さんっ!

小泉は

もういませんっ!」

「了解っ。

君も来て下さいっ!」

「いま向かってますっ!」

尊の返事は、
右京には聞こえなかった。

非常階段から、
屋上に到着したのである。

「……………っ!!」

右京は、
目指すべき相手を、捉えた。

気取られぬよう、
一息ついてから、
悠然と近付いていく。

「動くなっ!!」

鈍色のスーツと
赤のカッターシャツ。
風に揺れている長髪。

左手には拳銃。
右手には、
少し、肉づきの良い女性が、
ぐったりと凭れかかっている。

「動くと、
こいつの命がないぞ。」

滑舌のあまり良くない声には、
凄身があった。

右京は、静かに、
両手をあげる。

「そつだ……。」

一転、女性に突き付けていた
銃口を、右京に向ける。

この至近距離で、
あの銃口から
弾丸が発射されれば、

死ぬ。

右京は、少し、眉を潜めた。

「冥途の土産に、
聞かせて欲しいのですが、

柊里香さんを
仕留めたのは、
貴方ですね？

柳英九さん。」

「……ああ。」

「見事な仕留め方でした。」

解放軍にいた貴方なら、
傷を残さず、

一瞬で絶命するように、

頸動脈を圧迫する殺傷術を
身につけていても

おかしくはありません。」

「……あの女は、

少し、知り過ぎた。

……父親の元へ、

送ってやったただけだ。

完璧に、やった。

少し、邪魔が入ったが。」

ぎらぎらと眼を輝かせながら
右京に迫る柳。

「小林泰蔵教授も、貴方が？」

極限の緊張の中で、

柳の口が軽くなっている。

「違う。組織だ。」

「組織……?」

へりの旋回音が

二人の耳に届く。

歡喜を隠さずに、

へりに近づいた柳の表情は、

困惑に変わった。

ド

ン

ッ!!!

右京が駆け寄る間もなく、
スローモーションのように、
柳が倒れていく。

柳の亡骸から、

女性が、放たれた。

「……………生きてますっ!!」

女性を抱える

尊を他所に、右京は、

任務を終えて去っていく

ヘリコプターを見上げていた。

第22話

「お前たちは
なにしに来たの？
捜査方針を変えてやったの、
ぼくなんだけど。」

警察庁、長官官房室長室。

小野田公顕は、
少し茶目っ気を見せながら
背もたれを倒している。

右京は、コートを着たまま、
直立不動で語り始めた。

「振り返ってみると、
今回の偽札事件は、
不思議なことだらけでした。

遺体の現場に、偽札が、
発見してくれとばかりに
一枚だけあった。

大量のお札は、
一枚を発見するため、
そして、田尻警視を
罠にはめるための
カモフラージュでしょう。

捜査二課が、
長年、偽札事件を
追っていたことは事実です。

しかし、北高麗ルートは、
近年、解明が進んでいます。
あのように杜撰な捜査方針は、
いかにも不自然です。

『捜査二課は、
捜査などしていない』

その報告を受けて、
黙認したどなたかが
おられるとしか、
考えられないのですよ。」

「小泉徹也警部は、
大河内さんに、
田尻警視を告発しました。

田尻警視に、
自らがおかした罪を、
なすりつけようとしたことは
明白です。

田尻警視の部屋にあった、
僕が書いた上申書からすれば
大河内さんと、

田尻警視の間に、
何らかの意思疎通が
あったことは明らかです。

つまり、小泉徹也は、
田尻警視に情報を流していた
大河内さんをも、
罫にはめようとしていた。

そう考えるのが、
自然ですよね。」

小野田を前にしてでも、
尊は片手をあげながら、
事件の背景を整理していた。

「警察庁から派遣された
首席監察官を
罫に嵌めようとしている。

キャリアとはいえ、
一警部の彼が、
こんな大それたことを
しでかす。

…不思議でした
でしょうねえ。」

「ぼくもね、いろいろ
忙しかったんですよ。」

ただの、個人的な犯行だと、
決めつけるまでに、
結構、手間をかけましたよ。」

「個人的な犯行、ですか。」

「警察組織内部の、
仲間割れではない、
ということですよ。」

右京が解説して見せる。

「なるほど。」

「あら、
お前はそんなことにも
気づいてたの。」

「しかし、
あの偽札は『本物』でした。

……どこで造られたか、
ご存じですよね。」

「え？」

「すでに知られている
北高麗ルートであれば、
何の問題もありませんが、
しかし、」

「なにが言いたいの。」

「僕にはまだ、
分からないことが
三つあります。」

「なんなの。」

「ひとつ。」

「どうしてこの事件に、
公安部の外事課が、
強い関心を
持っていたのか。」

もうひとつ。

「どうして特殊部隊の
ヘリコプターが
都合良く屋上に
控えていたのか。」

「どちらも、
ただの偶然ですよ。」

「そうでしょうか。
事前に発砲を許可する
偶然があるとは
僕には思えません。」

北高麗『以外』の
ルートによる
偽札事件の解決を
遅らせたように、
僕には思えるのですが。」

尊は眼を白黒させている。

「お前は
相変わらず面白いね。

で、もう一つは
なんなの。」

右京は笑顔を浮かべたまま、
ふかぶかと頭を下げる。

そして、
小野田の前を通って、
官房室長室を後にした。

「あら。
ひどい奴だよね。
最後の一つを、
言っていないなんて。」

尊は、曖昧な笑顔を浮かべ
ふかぶかと頭を下げ、
少し速足で出て行った。

「失礼します。」

入れ替わるように、

一礼した後、

大河内春樹が入ってきた。

「お呼びとのこと。」

針金が入ったような

厳格な直立不動で

小野田の席の前に立つ。

「君は脇が甘いね。」

いきなり叱責する小野田。

「申し訳、

ございません。」

いかなる処分も、

お受けいたします。」

オールバックの髪を

機械仕掛けのように

ゆっくりと倒す大河内。

「処分なんてしませんよ。

でもね、」

「は……。」

『公安が

役に立つようになった

世の中っていうのは、

不幸なことかも

しれないね。』

大河内は、顔に

困惑を浮かべながら

黙っていた。

「そろそろ、仕掛けると

長官が仰せです。」

「！」

「やってくれるよね。」

賛成して、

くれたんだから。」

「はっ……。」

大河内は、

深々と一礼した。

第23話

面会に訪れた右京と尊を、
意外な人物が出迎えた。

「よう。」

精悍で、面長の神宮寺が
髪をたてていれば、
嫌でも目立つ。

「これは、神宮寺所長。
コミッションフーズでは、
大活躍だったそうですね。」

棚橋昌哉の身柄を
良く確保して下さいました。」

「よしてくれ。
あれは熊さん達の手柄だ。」

尊は、紹介して貰えない、
不満を顔に溜め始めた。

「あんに
嘘をついたことがある。」

「王有為さんのことですね？」

神宮寺は流石に舌を巻いた。

「……まいったな。」

「僕が貴方の立場でも、
同じことを
したと思いますよ。」

「……少し、お話を
伺いたいのですが。」

「ああ、
少しなら、大丈夫だ。」

神宮寺の招きで、
病室の扉が開く。

「神宮寺さん……
……。」

華奢な身体が硬直した。

「そのままで。
警視庁の、
杉下と申します。」

「同じく、神戸です。」

「王です。」

「……助けていただいたと

「うかがっています。」

留学経験もある王は、
流暢な日本語で礼を言った。

「詳しい聴取は

後日、別の者が

行うでしょうが、

少々、

お伺いしたいことが

あります。

「……よろしいでしょうか。」

王は、形の良い顎を
下に振った。

「11月18日の深夜、

貴方は、

柊里香さん

小林茜さん殺害の

事件現場にいましたね。」

「……はい。」

「……なにがあったのか、
話して貰えますか？」

「……はい。」

11月18日。

午後10時半。

「茜さん、いくらなんでも、危険です。」

王有為は、
窓を覗き込む小林茜を
必死に静止した。

「ほら、王さん、
良く見えるよ。」

……あれが、棚橋だ。」

柊里香姿の小林茜は、
隣の雑居ビルの建物内部を
覗きながら、
懸命にメモを取っている。

「茜さん、茜さんっ！
こっちが見られちゃいます！」

「どうして止めるの。」
絶好の足がかりじゃない。
英治君達を上を説得するには
確実な情報が必要なの。」

「でも、茜さんっ！」

王有為は、
窓に貼りつく茜を
引き離そうとする。

『誰だっ！』

茜が見ている窓が、
光った気がした。

「茜さんっ！！」

王は、渾身の力を込めて
茜を引っ張り上げた。

ぐにやり。

妙な手ごたえに
気付いた時、

大きなロツカーの角に
後頭部をぶつけ、
血を流して呻いている
茜がいた。

「ひゃっ！」

茜さんっ！！」

「……王さん、
だいじょうぶ。
だいじょうぶ。」

「……でもっ!!」

「あはは……
たぶん、気付かれたわ……
逃げて……」

「そ、そんなこと……」

「逃げて……っ!!」

口に泡を浮かべながら、
茜は必死の形相で
怒声を上げた。

「外へ出たら、
英治君達を……
呼んで……!!」

「ごめんなさい、
ごめんなさい、
ごめんなさい!!」

す、すぐ呼んできますっ!!」

王有為は脱兎の如く駆け出し、

階段を泣きながら駆け降りた。

ビルを降りて、

空き地まで出た、直後。

屋上に、何か

蠢く者たちが見えた気がした。

「署に電話をした時には、

茜さんは、もう……。」

王有為は、

涙を下しながら語った。

「そうか。

杉下さんがあの時、

ビルを駆け降りたのは、

この時間を測るため

だったんですね。」

「一度降りてから、

また次に登るまで、

少なく見積もっても

七分は掛かります。

柳たちが入れ違いに

屋上からビルの中に侵入し、

小林茜さんを
殺害することは
十分、可能です。」

「なるほど……。」

「あの時、
私が逃げなければ、
茜さんは……っ。」

泣き叫ばんばかりの王を、
右京は手で静止した。

「いいえ。」

残酷な言い方ですが、
あの時、貴方がいれば、
柳達に一瞬で
殺害されていた
ことでしょう。

「小林茜さんは、
警察官として、
命を掛けて、
貴方を守ったのですよ。」

「貴方はその貴重な命を、
大切に生きなければ
なりません。」

やさしく、諭すように
右京は言った。

王有為の睨り泣きは、
止むことがなかった。

第24話

ぴりりりり
ぴりりりり

助手席に座る

右京の胸ポケットから、
着信音が鳴り響く。

ぴっ。

「杉下です。」

……ああ。米沢さん。
やはり、そうですねか。
どうもありがとうございます。」

受信機を親指で
しっかり切る右京。

「一致しましたか。」

サングラスをした尊が、
正面を見たまま聞く。

「ええ。」

王有為さんの指紋が、
現場に残っていた、
正体不明の指紋でした。」

「となると、後は
小泉徹也の搜索ですね。

突入現場から
姿を消して以来、
行方不明になっています。

杉下さんは、
どこか心当たりは
ありますか。」

「それは、
捜査一課の皆さんに
お任せしましょう。」

今頃は、心当たり
向かっているはずです。」

「えっ……。」

福豊貿易公司、東京事務所前。

「ほんとうに、
出てくるんすかね。」

「あのいけすかない

監察官殿が言っ
てんだ。
間違いないだろ。」

「あつ！先輩っ！」

見る影もない

ボロボロの姿で、

連れ出されたのは、

「小泉……」

小泉徹也ですよ！」

「あのピル・イーター、

やりやがったな！」

屈強な男達が、

事務所前に立ち塞がり、

事務所の鉄門が

静かに閉まっていく。

後には、満身創痍の小泉に、

わらわらと群がっていく

捜査員達の姿があった。

「……つまり、

福豊省側の捜査当局と、

警視庁の間で

手打ちをしたと。」

「わが国と福豊省の間には
犯罪人引き渡し条約が
ありませんからね。」

個別案件を

処理しようとするれば
少々、強引なことを
する必要があります。」

「ですが、杉下さん。」

「なんでしょう。」

「福豊省側は、

小泉徹也が尋問時に
洗いざらい
喋ってしまうリスクを
負うことになります。」

よく身柄引き渡しに
応じましたね。」

「さあ……………」

「……………って、
交換条件は、
まさか、偽札ですか？」

「いずれにしても、
それは捜査一課、
捜査二課の皆さんに

「お任せしましょう。」

「はい。」

……つて、

「まだ捜査することがあるんですか？」

右京は驚いた顔をする。

「一番、やらなければいけないことが残っています。」

「え………？」

「田尻英治警視の、身柄確保です。」

「え、あ、

田尻警視ね。

はい、はい。」

……つて、

「杉下さん、田尻警視の行方を、これから調べるんですか？」

右京はさらに

驚いた顔をする。

その表情が、
尊のカンに触る。

「失礼。」

神戸君。我々は、既に、
田尻警視に、何度も、
逢っているんですよ。」

「……は？」

警視庁新宿淀橋署。
受付は今日も、多くの人々で
賑わっている。

「こんにちは。
どのような、

御要件でしょうか。」

受付の女性警官が、
姿勢も良く右京達を出迎える。

右京は、静かに
カウンターに立ち、
女性警官を見据えた。

「先日お伺いした、

警視庁特命係の杉下です。」

人差し指を立て、真っ直ぐに、
受付の女性警官を見据えた。

「田尻英治警視、ですね。」

お迎えに、ありがとうございました。」

第25話

淀橋署、副署長室。

「…いつから、

気付いとったのかの。」

熊野は、白髭をいじりながら、
苦笑交じりに

ソファーに預けた体を揺する。

「はじめて、田尻警視に

お逢いした時からです。」

事もなげに右京は返した。

「ふもっ！」

「…どういづことですか？」

まだ事情が

良く呑み込めていない尊が、
右京を直視する。

右京は一つ、頷いた後、

「最初に受付で、

我々を迎えた時、

女性警官の方は、

『申し訳ありません。』

田尻はただいま

休暇を取っています。』

とお述べになりました。

警察署の受付が、
署幹部の休暇を
把握していたのです。

署の受付は、外部の人間が
署幹部を訪ねてきた際は、
所在確認をするか、
上司に尋ねるのが
通常の手順です。
それを、いきなり答えた。

その直後の淀橋署の
皆さんの様子は、
さらに奇妙なものでした。

熊野警部、貴方は、
事態を收拾するために、
我々に近づいて
こられたのですね。

署の外に
我々を連れ出すことで、
田尻警視を我々の眼に

触れないようにされ、

直通の電話番号を
我々に伝えることで、
署の受付を通させない
ようにさせた。

灯台元暗しは、灯台の元を
照らされてしまったら、
元も子もありませんからね。」

「…さすがですのう。」

熊野は、
悪事が露見した小学生のように
身体を揺さぶって笑った。

「さらに、熊野警部は、
我々に幾つか、
嘘をつかれました。」

少し茶目つけを佩びた
笑顔を見せながら、
右京は熊野を難じた。

「ふおおおおおお…
人聞きの悪い。」

「まず、本庁への報告先ですが、
小泉徹也などではなく、

捜査二課長へ、直接、連絡を
行っていますね。

神戸君。」

「あ、ああ、はい。

失礼ながら、通話記録を
調べさせて頂きました。」

「警視庁宛の

一般回線通話は、
全て、録音されます。」

熊野警部の嘘は、

最初からばれることが
目的だったのです。」

「つまり、小泉徹也に、

我々が関心を向けるように
誘導した、ということですよ。」

やっと合点がいった、という顔で
尊が熊野の企みを整理する。

「そういうことです。」

言うまでもありませんが、

田尻警視は、
失踪などしていません。」

行っていたのは、
違法な潜入捜査ですね。」

「ふおおおお。
手厳しいのお。」

「神宮寺所長が、
黒衛商事幹部の逃亡を
我々に告げることが
出来たのも、

田尻警視が女装し、潜入捜査を
行っていたからです。」

「なるほど…。」

「田尻警視の室内を、
我々に物色させることで、

危険を伴う神宮寺所長の
単独捜査も止めさせ、

捜査能力の高い
本庁捜査陣を、この事件に
引っ張りこもつとされた。
お見事な手腕でした。

さすが、
難事件を数々解決された
老獪な熊野警部です。

我々は随分、
貴方の手のひらから、
出られませんでしたよ。」

「ふもつ。
褒められてるのか、
けなされてるのか、
わからんのお。」

「田尻警視の部屋から、
大河内さんに充てた、
僕の上申書が
出てくるとは、
思いもしませんでした。」

あれも、熊野警部は、
事前に把握して
おられたのですか。」

「私が、
処理し忘れたのです。」

短く刈り込まれた髪。
可憐とも言える瞳を隠す
爽やかな目元。

付くべき場所に
程良く配備された
実用的で無駄のない肢体。

淀橋署副署長、

田尻英治警視が、

右京と尊の前に、姿を現した。

「田尻警視、そのお姿では、

はじめまして、ですね。

杉下です。」

右京が、茶目つけたつぷりに

笑声を含みながら挨拶すると、

田尻は精悍な頬を赤らめた。

「同じく、神戸です。」

確かに優れた容姿だ、と

尊は冷静に思った。

頭脳はともかく、

もともと容姿の良さ自体を

誇る尊ではない。

「どうぞ、お座り下さい。」

直立不動で立っていた

田尻警視を、

まるで自分が上官のように、

自然に席を進める右京。

「まず、確認したいのですが、

田尻警視、柊里香さん

小林茜さんの遺体を、
窓から放りだしたのは、
貴方ですね？」

「…はい。」

「警視庁の捜査陣に、

殺された古林美里さんが、

柊里香さんと

同一人物であることを

知らせたのも、

貴方ですね？」

「…はい。」

「え。待って下さい。」

尊が慌てて手をあげる。

「何か？」

怪訝な顔で尊を眺める右京。

「財布の中に

田尻警視の指紋がついた

紙幣があるじゃないですか。

田尻警視は、自分に不利になる
証拠を残していった

「ことになります。」

右京は、
少々呆れながら尊に確認する。

「…財布の見つかった場所は
廊下でしたね。」

「え、ええ。」

「おそらく、現場には、電気は
点灯していなかったでしょう。
なにしろ、加害者は勿論、
被害者も、灯りを付けることが
はばかられる隠密行動を
していたわけですから。」

「と、いうことは…」

「おそらく、田尻警視の行動は
このような手順と思われませう。

まず、柊里香さんの遺体を
窓の外に投げる。
まずなによりも、
これが先だったはずですよ。

次に、自殺を仄めかす証拠を
綺麗に回収する。

この時に、ロッカーを動かしたのでしょう。

さらに、非常階段から屋上に向かい、犯人の痕跡を探していると、捜査陣が登場。

いささか早すぎる初動ですが身元不明の自殺で処理するよう内通者が動いていた可能性がある。

少なくとも田尻警視、貴方はそうお考えになった。

非常階段を出て、素知らぬ顔で捜査陣に加わった時に、古林美里の運転免許証を見ている本庁の刑事が見えた……

いかがでしょうか？」

口上を終えた右京の微笑に、英治は、深々と頭を垂れた。

「となると、貴方は、証拠隠滅、死体損壊の罪に問われます。」

たとえ、それが、
王有為さんが、犯罪者とされる
誤解を避けるための
緊急避難的な措置であつた
としても、貴方が、
柊里香さんの遺体を
損壊したことは、
間違いありません。」

「…仰るとおりです。」

「…ひとつだけ、
聞かせて下さい。」

田尻英治警視。

…貴方には、
柊里香さんを恨む、
一縷の気持ちか
あつたのでは
ありませんか？」

「ふもつつつ!!」

「杉下さんっ!!」

眼鏡越しに輝く右京の瞳は、
静かに、冷静に、だが、決然と、
端正な顔立ちの英治を
射抜いていた。

第26話

「これは、あくまで僕の、勝手な想像です。」

田尻警視、

貴方は、柊里香さんに、脅されていたのでは
ないでしょうか。」

声にならない叫び声を洩らす
尊と熊野、そして英治を、
右京は、右手を挙げて制した。

「あくまで、勝手な
想像としてお聞き下さい。」

柊里香さん

小林茜さんは、
警視庁のプロファイリング
チームに所属していました。

彗星のごとく現れた
美貌の占星術師として、
多くの一般人を虜にした、
心理分析官・小林茜による、
類まれなる説得力。

この虜となった、

田尻警視は、自らが
納得していない
様々な冒険を承服した。

これが、神宮寺所長の
見たてです。

ですが、僕には、
それだけには
思えないのです。」

右京は、一息つくと、
勿体ぶるように
三人を見まわした。

「……どういうことでしょう、
杉下さん。」

一番こらえ症のない尊が、
手をあげて疑問を表す。

「ごく、簡単なことです。

田尻警視の、趣味。
つまり、女装です。」

衝撃的な発言だが、
つい三十分前の
種明かしに比べ、
尊の衝撃は軽い。

「つまり、

田尻警視の女装趣味は、
小林茜に気付かれるまで
誰にも知られてなかった、

そう、

おっしゃりたいのですね。」

「その通りです。」

おそらく、

田尻警視にとって、
情報提供者は、

田尻警視自身
だったのでしょう。

屈強な肉体を隠した
頭脳明晰で妖艶な女性。
潜入捜査官として、僕は、
これ以上、適切な存在を
見つけることができません。

眉目秀麗、成績抜群の
捜査二課の敏腕捜査官の
成績を支えていたものは、
女装癖だった。

これは、格好の
恐喝材料になりえる。」

釈明を訴えようとする英治を、
右京は、再度押しとどめた。

「もう少しだけ、
僕の想像につきあって
頂けませんか。」

「おそらく、小林茜さんが、
最初に気付いたのは、
田尻警視の部屋に、
預けられた時でしょう。」

「一見、整理整頓された
几帳面な性格を
示す部屋です。」

しかし、
考えようによっては、
その潔癖さは、
些か異常ではあります。

そして、小林茜さんは、
天性の心理分析官です。

僅かな襷、かすかな裂け目
を見つけることは
自家籠中の芸でしょう。

貴方の家に小林茜さんを

あげてしまった時、
貴方の不運は始まった、
そう言ってしまったも、
良いかもしれませぬ。」

英治は金縛りにあつたように
動けないままだった。

「小林茜さんは、
貴方を、自らの目的、
八山会壊滅に向けて
駆り立てようとした。」

そのために、
田尻警視、貴方を、
もう一人の柊里香さんに、
仕立て上げたのです。
自らの耳とするために。」

「……………」

尊は、
ここまでの展開を踏まえれば、
うすうすそうではないかと
思つてはいた。

黒衛商事幹部が
良く出入りするクラブ

尊の口から言うことが
憚られる隠微な名を持つ

で、ホステスから
聞いた話と、右京の推理は、
完全に平仄が合う。

しかし、面と向かって
右京の口から語られると、
英治と同じように、
金縛りに囚われてしまう。

「最も得意とする潜入捜査を
自らの目的とは異なるものに
利用される。」

たとえその成功が、
自らの功績になるとしても、
誇り高い貴方にとって、
望んだことであつたとは、
到底、思えません。

小林茜さんの悲惨な境遇と、
哀しみに満ちた目的に、
心から同情を
寄せていたとしても、です。」

一息に推察の核心部分を
述べ終わった後、
右京はふっと息を抜いた。

「最も、小林茜さんの目的は
必ずしも、徹底していません。

彼女は、冷静沈着な
心理分析官です。

必ずしも幸多かつたとは
言えないその生涯からしても、

叶わぬ望みを抱くことが、
破滅に繋がっている。

それを知らずに
済ませられるほどには、
彼女の頭脳は、最後まで
明敏さを欠いて
いなかったでしょう。」

明晰な物言いをする
右京にしては、
やけに奥歯に物の挟まった
言い方をする。

尊が、奇妙に思った、その時。

「僕には、

…小林茜さんは、
死に場所を探していたように
思えてならないのです。」

「ふもつつ!!」
「…っ!!」

沈着な響きに、
一座が、しんとする。

「ただ一人だけで、
行方不明の恋人と、
亡き養父の仇を討つため、
日本有数の指定暴力団に
立ち向かう。」

幾ら、僅かな味方がいても
いや、僅かな味方が
いるからこそ、

小林茜さんは、
絶望的な企てに、

前途ある他人

神宮寺所長、

王有為さん、熊野警部、
そして、田尻警視、

そういった人々を
自らの燃え盛る炎に
巻き込むことに、
耐えられなかったのでは、
ないでしょうか。

勿論、彼女は、
最後まで、己の勝利を
信じようとしたでしょう。

しかし、死に際が
鮮やかであればあるほど、

僕には、彼女は既に、
哀しい覚悟をしていたとしか
考えられないのですよ。」

英治は、ただ、泣いていた。

「……私は、

……私は、そんな茜を、

……放り出して

しまったのですね。

アスファルトに
堕ちていく

柊里香

古林美里

小林茜は、

まるで、眠るように。

…茜に、死に化粧も、
してやれない顔に
してしまったのですね…。

警察官、失格ですね…。
人として、最低です…。」

とめどもない自己卑下に、
英治が囚われようとしていた
その時。

「いいえ、違います。」

決然たる、涕声。

「…神戸君。」

右京は、尊の顔を、
正視できなかつた。

尊は、涙を隠そうともせず、
無我夢中で英治の手を取った。

「貴方は、貴方は、
僕と違って、

小林茜に、
向き合っただんです。

僕は、あの時、

出世のことだけを考え、
茜の相談を、
面倒なもののように
邪険に扱ってしまった。

監察官に手紙を出すなんて
正攻法でも、
なんでもなかった。

僕が、僕がもっと早く、
茜に向き合っていれば、
こんなことには、
ならなかったんです……。」

美貌を台無しにして
嗚咽する尊に代わって、
右京は、静かに諭した。

「貴方の犯した罪に、
どのような処分が下るか、
私には分かりません。

ですが、これだけは
覚えておいて下さい。

小林茜さんは、
バツチを外した後も、
生涯の最期の瞬間まで、
警察官でした。

そして、田尻警視。
貴方は、小林茜さんの、
最後の、頼もしい
同僚だったのです。」

「……聞いたな、英治。
辞めるなんて
ぬかしたら、
ワシが根性、
叩き直してやるわっ！」

活を入れた熊野の笑顔で、
場の空気が、一変した。

「……分かりました。
杉下警部。」

「はい。」

「私の身柄を、
貴方にお預けします。」

エピソード

警視庁、特命係。

『福豊省系マフィア、
一斉摘発。』

「八山会系下部組織が
取引相手か。」

「警視庁、慎重に
余罪を追及。」

新聞三紙、雑誌四誌を
入口の机の上に広げた尊は、
小さくため息をついた。

「…偽札の話は、
どこにも
載っていませんね。」

あら、
ネットも同じですね。」

「中園参事官は、
ありふれた
麻薬摘発として
記者発表したようですよ。」

「それにしても、
今回の事件は、
いろいろ謎が
残りましたね。」

「といたしますと？」

「例えば、黒衛商事での
爆弾騒ぎです。」

爆弾処理係によれば、
爆弾らしきものは、
全く見当たらなかった
そうじゃないですか。」

「代わりに、銃火器類を
多く押収したそうです。」

しれっとした顔で
応じる右京。

「ええ、一個中隊分は
あつたようです。」

小泉徹也の言う通り、
地下に突入していたら、
参事官の首では、
済まなかったかも
しれませんね。」

意地の悪い笑みを洩らす尊に
ティーカップを手にしながら
ジト目で睨む右京。

「ひまかつ？」

…いいねえ、

あいかわらず

ひまそうだねえ。」

いつものように、
角田課長が左手を
大きく上げて、
照明のない特命係に
入ってくる。

「忙しいん

じゃないんですか？

八山会系統の捜査。」

「それがさあ、

組対部長命令で、

捜査打ち切りだったさ。」

「おや。」

「…そうすると、

柳が洩らしていた、

『組織』の解明も、

難しくなりそうですね。」

「ああ。」

まあ、部長の言う通り、
八山会と、正面から
ドンパチする能力は、

事業仕分けで切られてる
いまの俺等には
ない、つてのも、
確かなんだけどね。」

悔しさを笑いに代えて、
角田は今日も飄々と
マグカップにコーヒーを注ぐ。

「そういやさ、
あんたが運んできた
田尻の奴、
どこいったと思う？」

「どこでしよう。」
芸もなくオウム返しに
聞く尊。

「へっへっへ。
福豊省公使館の、
一等書記官だったさ。」

「おや、外務省へ
出向ですか。」

「副署長からだ、
かなり珍しい人事ですね。」

「遺体損壊に
緊急避難性を認めたことと
今回の大手柄で相殺
いや、相殺以上だな。」

あのピル・イーター、
何考えてやがるんだか。」

「そうですか。」

笑顔を洩らした尊は、

「って杉下さん？」

コートをからげて
出ていく右京を、
慌てて追った。

「うん。そうしたよ。
外務省に、ちよつと無理を
聞いて貰った。」

日比谷公園のカフェテリア。
右京の目の前で、
小野田が優雅に紅茶を啜る。

「随分、危ない真似だと
思うのですがねえ。」

田尻警視は、今回の件で、
先方の特殊機関に
マークされたと思います。」

「そうだね。」

無表情のままに頷く小野田。

「外交官公邸に入る
公僕には、接受国側は、
身辺調査を忘れません。」

既に、偽札捜査で
浮かび上がってしまった
田尻警視が、
適任とは、僕には
とても思えないのですが。」

「うん、そうだね。
ぼくもそうおもう。」

「でしたら、なぜ。」

「杉下。」

「はい。」

「ぼくは彼に、

『うまくやってくれ』
っていったよ。

隠れた命のことも含めてね。」

小野田は、

無表情を貫いている。

「……………」

「彼だけじゃない。

組織に属する人間は、
皆、誰かを利用し、
誰かに利用されるんだ。

その意図が悪意であっても
それを知った上で、
上手く使える
器量がなけりゃ、

この世界では、
生き残れないよ。」

「彼も、官房長にとって、
一介の駒ですか。」

「そうだね。」

こともなげに言う。

「で、ほくも、

誰かの駒なんだよ。

杉下。

お前だけ、

逃れられているとでも
思ったら大間違いだよ。」

右京は無言で、

ハーブティを一口啜った。

「きみもそうだよ。

神戸尊君。」

「……あら、

ばれてました？」

三つ隣の席で、

英字新聞を読んでいた
サングラスの男が、

半笑いで近付いて来る。

「ばれないと思うほうが、
不思議ですがねえ。」

さすがに微苦笑を
禁じ得ない右京。

冬の陽に照らされた二人を、
小野田は、何か遠いものを
観るように眺め渡した。

「きみらはいいね。
自由で。」

でも、
いつまでつづくかな。

「じゃあ。」

小野田は、捨て台詞とも
取れる言葉を残し、
珍しく、先に席を立った。

右京と尊は、
二人で深々と頭を下げる。

「いきましようか。」

「あ、はい。」

冬入りした空は、
透明な青色に輝いている。

凜とした肌寒さが、
太陽に揉まれ、
コートを絡げて
歩くには心地よい。

「ところで、杉下さん。
ひとつ、
よろしいでしょうか。」

「なんでしょう。」

「港区で、
どんな事件が
あったのでしょうか。」

「はいい？」

「僕も杉下さんが
おっしゃったことを
一つ一つ

思い返しているのですが、
熊野警部にお伝えした、
あの一言だけが、
謎なんですよ。」

「ええ。」

機械的に生返事をする右京。

「明敏な杉下さんが、
新宿区と港区を
間違えるなんて
ありえませんかよね。」

淡々と確認するように呟いた
尊に対し、

『勿論です。』

少し、震えるような
声を出す右京。

しかし、自らの思念に
取りつかれている
尊には聞こえない。

「ですよね。
で、港区で、
同じようなビルで、一体、
何があったのでしょうか。」

ぴりりり
ぴりりり

「……杉下です。」

…あ、ああ、
米沢さんですか。

あ、あ、はい。
すぐ、うかがいます。」

「どうしました？」

「テレビ局の
製作会社の方が、
お見えだそうです。」

例の映像供出に、
協力してくれるようです。」

「ああ。
もう、八山会系の
息のかかった芸能人に
脅される必要が
なくなった
ということですね。」

「ええ、暫くは、
大人しくしてるでしょう。」

「そういえば、
製作会社は、港区ですね。」

ひょっとして、
これですか？」

余裕の出た右京は、

ふつと息を洩らした。

「さあ、どうでしょうね。

行きましょうか、

神戸君。」

一歩先に、警視庁に戻る
並木道を歩み始める右京。

「あ……、はいっ。」

それに寄り添って、
尊も、歩き始めた。

尊が、ふと、見上げた時

冬の青空は、

どこまでも、

澄み渡っていた。

エピソード（後書き）

最後まで読んで下さった方へ。

まずは、

ホントにおつかれさまでした。

この小品は、

「出てこない主人公」

というコンセプトを

思いついて、

あとは、勢いだけで

書いてしまったものです。

舞台設定は、

「劇場版2公開直前」

くらいまでの

相棒／警視庁特命係

（尊を書いたものが

無かったので、

と、

「赤い蝶」後くらいの

神宮寺三郎シリーズです。

かなり、ぐだぐだな、

赤面ものの穴だらけの

駄作だと思います。

（田尻警視が女装に走った理由を
書き落としたり…）

こんなくだくだなものを
ここまで読んで下さって、
ホントに、

ありがとうございました。

特に、

「おきにいり」

に

入れて下さった方へ。

貴方のために、
最後まで、
書きおろしてみました。

もし、少しでも
気に入って頂けたら
こんなに嬉しいことは
ありません。

あらためて、
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7301p/>

茜色の冬空

2011年1月26日22時27分発行